

、優陀夷か懐かし、磨が病ふに父君も、然ぞや本意なく思すらん。然りながら是とても、生なる者の慣ひぞかし。若し此上に如何なるとも、父上母君の御前をば、優陀夷能く諫めよかし。アラ果敢無の磨が病氣や」と、言ひつゝ、痛つがはしげに、又も枕に着き給へば、優陀夷は尙も進み寄り、「是は若君の仰せとも覺えず、父君母上始めとし、百官百司の輩の、碎く心を何故に、愛懸納受在まさて、斯く餘所しく遇し給ふ、思召の程こそ疑がはしけれ。御望みの儀も有るならば、斯様に親しみ参らする、我々なれば明々地に、語らせ給へ、聞かまほし」と、啣てば太子は起直り、聊か容を更め給ひ、「如何に、優陀夷、磨が身に、他へ隠し偲ぶ事、露ほども無けれども、若しもや人の讒言にて、他の見る目に疑ひあらば、それこそ磨は聞かまほし、いざ聞かせてよ物語れ、何ぞ今日までも告げざりし」と、却つて優陀夷に恨みの言葉、聞きて優陀夷は少しも隠せず、此所ぞ御爲思ふ存分、申上げんと胸を据ゑ、「アラ空々

しき御言葉、如何ほど御心に秘さるゝとも、其の肺肝を鏡にかけて、疾く見極め奉りしぞや。そも君の御心は、飽くまでも發心の道に、思入り凝らせ給ふ、然るからに過ぎつる頃、舞の御會のその時にも、一人の公達の並々ならぬ、悟りの道に御心を、留めさせ給ふ事までも、疾く知りたれば其の公達は、最早や御目通りを止めたり。如何にも浅ましき御舉動、先年相者の見し如く、十善の御位に、若しや即かせ給はぬ時は、父君の御血統も絶え、慈悲大賢王より連綿と、三十八代の、釋種の天下も覺束なく、大小の朝臣の、其の悲みは如何ばかりぞや。是に依つて願はくは、御先祖を敬ひ臣下を憫み、發心の御志を、偏へに留まらせ給はれ」と、臉重たく述べければ、太子も今は道理に服し、御涙に暮れ給ひしが、良有つて宜ふやう、「如何にも汝が言葉聞届けたり。是までは磨が心に、天寛が魅入りて不孝たりしが、今より心改めて、十善の位を嗣がん。ノウ優陀夷、重ねて案ずる事勿れ」と、御一念の露れさせ給ひし、御言葉

を聞くよりも、優陀夷は蘇生りたる心地して、「アラ難有や、それでこそ、御代紫茶の基なれ、されば此度帝より、太子の徒然御伽の爲、眉目容麗はしき妃を傳げよとの宣旨あり、依りて諸國の王達へ、此趣きを觸れ流せり。それにつき新宮造營を、取急がせ候へば、只今の御言葉、重けて變らせ給ふな」と、堅く誓ひて悦び勇み、其日は其儘退きけり。

去程に太子は優陀夷の陳言にて、十善の御位を尊み、是まで御心に惚ばれし、發心報謝の道をさらりと打捨て給ひしかば、忽ち御氣色も癒え、常になき御機嫌の麗はしきに、帝を始め橋邊彌の方、御附人は男女とも、只火中より玉を拾ひし、心地して打悦ぶ。中にも生若き女中達は、太子此程の御装ひに、飽くまでも愛て従ひて、何につけ彼につけて、御側に付き纏ひ置むれける故、橋邊彌の方は、太子の年頃といひ殊に又、人並勝れし装ひに、若し亂りなる事もあらば、帝の思召且つは又、國中への聞え悪しからんと、心の内に工面あり、何と

ぞ早く新宮を造進せよと諸役に仰いで、萬事急がせける程に、早や新宮は成就して、ひ々に吉日を選び、御引遷りあるべしと、仰出だされたりければ、橋邊彌の方打悦び、兼てより所存ありて、養ひ置きし馬將軍の、娘鹿女女の年もはや、いざよふ月を二つ三つ、越せども心も未進心なる、妾言堂願やかさ、並々ならぬ様はづれ、然れば命婦は橋邊彌の、御言葉を其儘に、野女へ通じ更めて、御側へ連れ出でければ、橋邊彌の方密やかに、膝元近く召されつゝ、「今更めて此へ呼び、申聞かすは外ならず、其方の父へ忠戒の報い、存生にもあらば一匹の、國土にも封する筈なれど、敢なき最期に及びし故、帝も自らも心を痛め、何とぞ立派に其の家名を、立てさせんとは思へども、男子無ければ詮片なし。依りて此度木々を、太子妃に傳くれば、心に心を能く用ひて、若しにもしほたゝとした、妾も言葉にも、情氣がましき素振など、是第一の女の嗜み、必ずよや忘れなせよ」と、我子の如く慈しむ、心の誠願れて、幼き者

に言ふ如く、細々と言ひ聞かすれば、鹿野女は只差俯向き、流石根らむ顔に袖、最と羞かしげに嬉しとも、忝けなしとも山梶子の、花もの言はぬも中々に、未通女に見えて愛らしきを、命婦は見兼ねて飾へ寄り、これのう鹿野女殿、嘸嬉しかる、難有かる、早うお禮を申してよ」と、押遣られて手を支へ、「コハ冥加なや、賤しき身を、左程に重くお取立、國許への聞えと云ひ、且つは冥土の父母も、さぞやさぞ草葉の陰にて、御情の程如何ばかりか、難有がり侍るべし。此上ながら幾重にもお恵み厚く御教訓の程、願ひ上奉ります」と、事閑雅に述べ終れば、命婦は再び附添ひて、馳て御前を退き下れば、早くも此の沙汰それとくに、達せられしかば内外の者、扱ては鹿野女は今日より、太子の妃に供はりしと、遽かに敬ひ遇しつゝ、針明多聞も數多く、附け添へられて、華美かなる、奥の局を其儘に、常の居間に下されしより、鹿野女は只管難有く、是皆幡曇彌の御恵みと、深く悦び數多の女中へ、身を謙遜りて騰らぬ、「ひ音

づれに皆々も、斯程に優しき心立てなればこそ、鹿野女さま思ひも寄らぬ玉の輿、肖かりもの仕合せものと、寄るも觸るも目引き袖曳き、羨ましげに呟きける。扱又幡曇彌の方は太子へも、鹿野女の事云々と仰せあり、一方ならぬ妃故、御不憫を加へられて、親み給は、自らが、心を添へて育てし甲斐も顯れて、父馬將軍の菩提の爲にも、悪しからまじと諫め申せば、太子も亦最と、羞かしげに差俯向き、僅かに點頭き給ひたる、折から優陀夷の女房立出で、「はや夕供御の御支度、調ひし」と申上ぐれば、母君へ太子は暇乞ありて、御居間へ歸らせ給ふに、折しも夏の夕暮方、數多の女中も涼やかなる、肌薄衣の染模様、中形小紋かすり縞、皆當世の色綾を、思ひくに着飾りて、我劣らじと並居る中にも、濃き紅は奥殿の、園生に植ゑて隠れなき、鹿野女の方の粧ひは、髪の毛筋も縁なす、岬の羽重ね艶やかに、花の簪取揃へ、白く妙なる額の富士に、かゝる霞か薄雲の、振袖繫す舉動は、水際立ちて華美やかなる、太子は

御舞に着き給ひ、聽て御涼みの御宴始まり、數多の者へも御調下され、  
 歌舞曲さへ催されて、殊更典に入り給ひ、其夜よりして御所、鹿生女の  
 の御愛を愛給ひて、媚めく様に聞えたり。されば新宮も殘る方なく、造營成  
 就せし由にて、既に御移轉の吉なりければ、太子のお附は残りなく、早や  
 新宮へ引移り、其日の御祝ひ取々に、持離す其中へ新規に召抱へられた  
 る、多くの美女の其の内にて、釋種の親屬執杖が娘、年は二八の眉若き、盟  
 陀彌女の麗はしきに、太子の御目留まりし故、是も妃供はりぬ。りの者も  
 それづくに、お附の役を賜はりて、宮仕へしける故、夜の御殿の酒の筵、其  
 の華やかさは中々に、言葉も及ばぬ事とかや。之等の有様月待殿にて、帝優陀  
 夷より聞し召し、然らば愈々太子には、發心の志の、根も薩張と切れ侍は、  
 聽二人の女の内へ、若君誕生もあらんとて、悦び給ふ其の處に、右衛門太郎  
 次の間より、「今淨飯大王へ奏し奉るは餘の儀にあらず。某過ぎし頃よりし

て、太子如穿として、普れく諸事を尋ね巡り候處、迦夷衛國の國王の姫に、  
 耶輪陀女と云へ美人候が、彼、凡そ美人多しと雖も、是  
 に優者はなく、是ならで太子の御心、さし、らり可き者の、よも外に有る  
 べからず。趣、優陀夷ハ臣より、帝へ宜し御取、御披讀頼み奉る」と、  
 言、優陀夷、聞き敢す、則、御前へ手を、右衛門が言葉云々と、奏、ば  
 聞、召し、「然らばそれを入りさせん、然りながら先も國王の事なれば、  
 右、事にもな、まじ。此、者、そ優陀夷、らで、外、勤むる者はなし。急い  
 て迦夷衛へ、聘を携へ、耶輪陀女、婚儀の事を、申結び來るべし」と、仰  
 せあるを傍聽、右衛門、郎、出で、「恐れながら大王へ直さく、に申上  
 げん、和、迦夷衛、は、親し、中、候故、則ち太子の御有様を、包、隠さ  
 ず述べければ、はや、にて、御、までも、太子の御仁徳を委しく知りて、何  
 とぞ小國とて見落し給はず、悉、我姫の、婚儀を取結び下さらば、近國へ

の聞え家の恐れ、偏へに頼むは右梵士どのと、彼方の言葉を幸ひに、然らば近々兎も角も、悉達太子様野遊山に托せ、是へ御入りか願ひ見んと、申し談じて下拙は、直様立戻りたる仔細、斯くの如し」と述べければ、帝御機嫌麗はしく、「扱ては能くこそ計りたれ、然らば日柄を相運び、太子を只何となく、迦夷衛國へ赴かせ、互ひの様子を見せしめて、縁に任せて呼び迎へん。優陀夷宜きに計らへ」と、仰せて又右梵士太郎を、再び迦夷衛國へ赴かしめ、近日太子の御入りを、知らせらるれば彼の國にては、大國の太子の御入とて、表立ちたる事なられど、見苦しきは國の恥辱と、遽かに城の内外を修復し、間毎も綺羅美やかに、庭の景色まで作立てさせ、太子の來を待ちたりける。其悦びに引易へて、伊婆加國の提婆達多是、過ぎし頃太子尊頭覽の院へ、入學せしと聞きしより、小弓の勝負に打負けたる、遺恨を發らさんと摩揭國の、北冥山に棲む魔術の長、法性妙顯を誦らひ、惡鬼外道を味方に附け、悉達太子の亡ぼさんと、

腹黒く計りしが、諸神諸菩薩の守護に依つて、太子は危き命を免がれ、恙もなく迦毘羅城へ、歸りたる後とて、馬將軍の計策にて、地蔵の首を太子と見せし、是等の無念骨髓に徹し、何がな仇を報はんと、手ぐすね引いて待つ折から、此頃頼りに諸國の内を、淨飯王より穿鑿して、眉目容態はしき娘を、選り抱ゆるとの噂にて、既に近國迦夷衛國の美人、耶輸陀羅女を太子の妃に、近々娶るとの沙汰あり。提婆聞くよりも益々怒り、如何て是を聞捨てにせん、彼奴とは従弟同士ながら、我年長の智慧を揮つて、耶輸陀羅女を横取りして、朝夕手活の花にして、太子に恥面搔かせんと、己に齊しき惡黨を、呼集めつゝ妨げすべし、計策をぞ回らしける。とは知らずして迦毘羅城と、迦夷衛國とは因を結び、或日優陀夷の計らひにて、御供立も僅かにて、太子を乗物へ乗せ参らせ、道を進びて忍びやかに、迦夷衛國へ入り給へば、兼ての申合にて、禮儀を省き目立たぬやう、案内の者心得て、直ちに奥庭の方へと誘ひ申せば、耶輸陀羅女

は今一を賑と手を凝し、取飾りたる粧は、さながら外近も斯くあらんかと疑ふ計り、あたり邊眩ゆく打扮ちて、いたた腰元乳母めとき従へ、しつと袂と出て迎へ、太子の姿を只一ひと見るよりはつし羞へりたる、心の内に思ふやう、常々噂に聞きたるが、實に三十二相備はり給ひ、おんおまきしほしちうぞ御血おんちが風信かぜしん、オオ紋つきの懸はしさと、只俯向きて言葉なく、かたし裁らめて在、まじほどに、物に慣たる一人の乳人めとが、太子に會釋しあしや、姫諸共、庭に見晴らす御座敷へ、誘ひ申してうづたか、酒菜を出だして、取並べ、ふたかたみ御心を、打解うたかきさせ奉らんと、頻りに遇し参らすれば、太子も娘の粧ひに、深く心を寄よ給へば、姫亦此君ならで、我が添綴する殿達は、よもあらじとて、人知らず、心結こむすふ、かみ沖おきりして、在おほす處へ右梵士太郎、一人の黒黨を、高手小手に、さし納め、勢ひ猛たけく、太子の御前へ引來り、「最前さきより那の殿陰にて、怪しき鳥の鳴く聲に、心許こころし立越えて、窺ひ見れば是なる盜賊、殿砲の火蓋ひふたを切つて、太子の方を狙ねらひ澄まして、居たるを手早く取押へ、

斯くの如くに縛めたり。只今此所に、首討ら申すを、太子を始め優陀夷どのも、御見物下されよ」と、刀の柄つかに手かくれば、優陀夷は暫しと辨止め、「ヤアそれなる盜賊、何仔細之つ、世によて仁徳厚き、太子に仇あだなし奉るぞ。事によつては命も助けん、有様に様子ようす計れ」と、情をかけて詰寄れば、「ア、命だにお助けあらば、なにが扱て隠し申さん。私は提婆ていばどのに、頼まれたる忍びの者、今いま悉太子様の、此所へ與給まじつとき、打殺して立歸らば、あつせ適れの傷美取らせんと、いふ吩咐ふつけられし申斐もなく、此様に細められて、只今首を討たれては、傷美どころか命が無い。兎角うづつ浮世は命が物もの、何とぞお助け、御免ごめんく」と聞くよ、優陀夷は尙前寄り、「シテ又提婆は何處いどこにあるぞ」、「然れば候、提婆どののけし、の山賊を語らうて、い婆や、ま國くにの山路川筋を堅め、太子の還かへり受けて、討取らん結構な」と聞くより顔を見合せて、皆々慄然おどろ愕おどろきしが、右梵士太郎立懸、「アア有難や此盗人こそ、則ち天の賜物なれ、さ

あ其の後を語れ、あ「されば此の外の國々も、横道よこみち間道まみちまでも人數にんずを廻し、多勢たせいを以て取り切りたれば、最早ともこのお手薄てうすなる。御供ごこうにては中々に、切援きえんけて迦毘羅城かひらじやうへ、還幸えんさうは叶ふまじ」と、聞くも身の毛けの彌立やたつ計り、中にも迦夷衛國王かゐゐは、心の工面くめんとおいつ、思案しあんに暮れしが良有りやうつて、優陀夷うたゐを小陰せういんに差招さしめき、「あれなる者の今の白狀かりそめ、苟且かりそめならぬ御一大事ごいちだいじ、能く思案しあんを回めぐらせしに、此の海上五十里ごじゅうりを横截ごうせつり、旃羅國せんらこくを廻りて還幸えんさうあらば、道は遙かに遠しと雖も、提婆ていばが計略けいりやくを免まぬがれて、太子たいしに恙しんまじまじと、思へば此節このふしの下より、快船はやぶねを申付けん。抑おさり此の快船はやぶねと申すは、軍用の貯へにて、一日の順風じゆんぷうには、三千里を走る稀代の用船ようせん、早うくと快船はやぶねの、櫓舵ろのらをしめさせ用意よういを爲し、太子たいしを始め耶輸陀羅女やじゆたらにょ、腰元こしもとまでも打乗うちりせて、急がし立つれば、優陀夷うたゐは又、右梵士うたゐ太郎たうらうに打向うちむかひ、「汝は是に留まりて、下人げにんどもと言合せ、太子たいしは尙此の所に、在おする體ていに假裝かりそめして、お乗物のりもの長柄ながへ共外ともも、城門じやうもんの外へ飾り置くべし。

これ提婆ていば方の者どもへ、油斷あぶらをさする一つの計畧けいりやく、必ず共に拔ぬりなせそ、いざ然しからば」と快船はやぶねの纜解りやくより國王こわうは、走り寄りつゝ言葉ことばを懸かけ、「返すくも行届ゆきとどかぬ娘むすめ、優陀夷うたゐどの、其餘かたの方々かた、偏ひとへに頼たのみ参まらする。おさらば、さらば」と國王こわうの、言葉ことばも我子わがこに夜の鶴よる、謙遜けんそんりたる挨拶あいさつに、太子たいしも厚あつく暇いとま乞こひ、五十里隔ごじゅうりつ向むかふなる、山やまを目當めあてに舵かじを取り、早はやや順風じゆんぷうに帆かを上あぐれば、矢やを射やる如ごとくに程ほどもなく、旃羅國せんらこくへ着きにける。此所このところぞ甘露飯かんろはんの佳國けいこくなれば、優陀夷うたゐを以て仔細しじゆを告つげ、兵士へいし三十五人さんじゅうごにん請こひ受うけて、列りを亂みださず迦毘羅城かひらじやうへと、還幸えんさうまし／＼けるとかや。扱あまた迦夷衛國かゐゐにては、右梵士うたゐ太郎たうらうが計からひにて、彼の細付こまの盗人ぬすびとへ、太子たいしの御召更ごめしへかを着きせ、密ひそに乗物のりものへ打乗うちりせて、是ぞ太子たいしと見受みうくるやう、恭こしく附つき従したがひて、伊婆那國いばなこくの横道よこみちを、迦毘羅城かひらじやうへと急いそぐ折まから、何處いづこよりか鎬根かぼねの、征矢せいや一筋ひとすぢ飛とび來きつて、乗物のりものへ發矢はつやと立つ。途端いとこに一聲ひとこゑ魂消たまげるは、亦また何事なにごとと右梵士うたゐ太郎たうらう、乗物のりものの内檢うちけんめ見て、大音おほねに呼よばるやう、「ヤア

何者の仕なるや、勿體なくも迦毘羅城の太子、迦夷衛國野遊山の還幸を此所に  
に件受け、何の罪いに制止めたるぞ、名乗つて出てよ、右梵士太郎が、手に離  
れて討死する、死ね狂ひの手並の程、此世の名々別別に、思ひ知らさく、何者  
ぞ、出でよ、來れ」と叫ぶ内、山道も、八九人走り來り、乗物日笠  
けて立掛を、太郎は遣らじとせへる隙、乗物打捨て陸尺どもは、只一散に  
足曳の、山踏分けて逃げ去つたる、後に右梵士只一人、山賊どもは多勢を  
みに、打つて蒐つて引違へ、突き掛けるに身を交はし、飛び蒐るを拂ひ返け、  
元よりナ士の十人前、然も目立しく見えける内、弓矢携へ出て來たる、提婆  
多はしたり顔に、願をしゃくり、乘り睨み、「ヤアく者ども、下人一人に目を  
懸けずと、其乗物引抜き、早く城内へ急げ」と、指押の聲 聞くよりも、  
遣らじと焦る右梵士に、「どつこい然うは」と盗へども、前後兩傍より、四人  
一度に組付きて、組んづほぐれつ揉合ふ内、太子の乗物兩人にて、手早く擦ぎ

上げつゝも、提婆が附添ひ逃げ行くを、太郎は故と道かけんと、するを競り  
合 押し止め、遂に乗物の後見えざるまで、取付き組付き防ぎしが、馳て山賊  
どもは太郎を突き退け、「此奴一人助けしとて、开も何程の事あらん、勝手に逃  
げろ」と口には虚言、身は頭へつゝ馳去らんと、するを太郎は引摺み、一人を  
眞へ差上げて、「さらばお暇いらう」と、四五間先へ頭顛動、又踏へたる一人を  
ば、那へとと蹴飛ばしつゝ、「此奴等一人も活け歸す、奴等ならねど太子を  
射止めし、發美として助けてやる。一昨日來い、蛆蟲奴等と、打與じつゝ、踏  
んばたがり、心の内の可笑しさに、獨笑して四下を見廻し、「最早や迦毘羅城の  
下人等も、有りなく逃げ延びつらん、無益の事に暇取つたり、いざ此由を少し  
も早く、ぞへ奏し奉らん」と、尻巾擲げ手拍子打つて、迦毘羅城へと、「してこい  
な」めでたしく。



# 釋迦八相倭文庫

## 八編之序

夫れ八は物の名員にして、天に八家、星に八座、八種の  
 雷神あり。地に八大龍王、八間地獄、八功德水。易に八卦。  
 人に入苦あり。之等の八の數あげて算へ難し。然れば佛祖  
 は八正慈悲の門より出で、八萬の法を説き給ひ、八十歳の  
 霜を頂きて、生天、都率天、下天、託胎、出胎、出家隆  
 魔、轉法輪、入滅の成道、八相を現はし、説法の經文廣大

なれど、法華經八卷に勝れたるを聞かず。扱て此の冊子の  
戸紐は、八百八町と聞えたる、大江戸の水を硯に湛へ、八  
千八聲の啼く頃から、葉月の初つかたまでには、稍なりて  
上梓す。

弘化五戊申年正月開市

万亭應賀誌

### 釋迦八相倭文庫八編

本程に悉達太子は、提婆が爲に迦夷衛國にて、危き虎狼の口を遁れ、耶輸陀  
羅女と、快船にて、伯父甘露飯の住國、旃那羅城へ着き給ふ。此所にて物具供  
人數多驅り求め、恙なく迦毘羅城の新宮へ還。幸まし／＼ければ、優陀夷それ  
ぞれの者も、安堵の思ひを語りける。程なく右梵士太郎御後より、御供人を連  
れ歸りたる、其の次第を優陀夷まで申上ぐれば、太子の御耳へも入り、最とい  
愛て給ひて、又も迦夷衛國へ赴き、耶輸陀羅女と、婚縁の儀式の事を語らせけ  
れば、戀て吉日を選び迦夷衛國よりは、様々の贈りものを調へ、數多の役人を  
添へて、美々しく迦毘羅城へ送られける事、近國へ聞えける故、飽くまで計ら  
れし提婆達多、我手の者を太子と見違へ、生捕らせし事の腹立たしき、其の報  
いには、耶輸陀羅女の婚姻を道に待受け、奪取らんと巧みしかど、何者の知らせ

にや、姫は早や迦毘羅城へ、過ぎし頃行きたりと聞き、齒嚙をなして口惜しが  
 り、愈々謀叛は止まさりき。然れば迦毘羅城にては、吉日の御祝ひとて、奥殿  
 にて耶輸陀羅女と、獻々の盃取交はし、千秋萬歳と、龜鶴の婚儀を催されけ  
 れば、淨飯王を始め橋登彌の方も、末頼もしげに悦び給ふ。それに引替へ物憂  
 きは、鹿野女瞿陀彌女の二人の姫なり。同じお伽の役ながら、耶輸陀羅女の方  
 は、太子殊更ら寵愛ある故、人の用ひも一方ならずと、我が仇なきを省みず、  
 二人とも心の内に、耶輸陀羅女を妬み啣ち給へば、其の附隨の女中は、相りひ  
 に我が勤むる主人をのみ、只大切と思ふものから、何とぞ此方の姫君の方へ、  
 御通ひあれかしと、様々に心を碎き、鹿野女の方は、瞿陀彌女の方を憎み、又  
 瞿陀彌女の局は、耶輸陀羅女の方を妬み、又耶輸陀羅女の局は此方へ太子の御  
 通ひの繁々なるを鼻にかけ、是見よかしと誇りける故、三女の方の附人は、局  
 多聞に至るまで、行き通ひにも肩で風切り、互ひに言葉も交はさざる事、橋登

彌の御耳に入り、こは安からぬ事ぞかし、若しや御子の身の上に危き事もあら  
 んかと、優陀夷の女房を召されつゝ、三女の方を御居間へ、招くべしとありけ  
 れば、直ちに此趣きを、三人の姫君に申上ぐれば、こは何事と思ひながら、互  
 ひに衣服を着飾りて、我劣らじと時を違へず、月景殿へ赴きければ、橋登彌の  
 方三人の、姫を饗應し給ひつゝ、良有つて仰せ出ださるゝ御言葉に、如何に姫  
 達、更めて、言ひ聞かす事外にもあらず。夫れ女は自他ともに、責きも賤きも、  
 押並べて三つの油断あり。此三つの障害は、如何ほど心に察みても、忍ばれぬ  
 ものにて、宜しからぬことなれば、確かに諭し参らす故、三人とも心に心を  
 付けて能く守り給へ。扱て其の三つの油断と申すは、一に睡眠未練とて、心打  
 解け仍なく睡り、二つには自慢未練とて、徒らに我身を誇りて、人を蔑ろに見  
 下し、三つには嫉妬の未練とて、是は別けて宜しからず、互ひに威勢を争ひて、  
 遂には己れが命を捨て、人を咒咀うて恐ろしき、巧みを企つれば、譬にも

嫉妬なき女は、百拙を掩ふとありて、嫉妬の一念さへ無ければ、百の悪しき事をも隠すとかや。斯程に戒めたる事なれば、女は淺ましき者にして、今姫達に諭しぬる、自らさへも一度は、其の嫉妬にて卒なき者を、妬みつ誹りつしたりしが、心着きては我身で我身を恨めしく思ひしより、大凡其の邪念を露らせり、然れば和女達は心言葉も優しきに、よも其等の淺ましき、志は持たれまじ、なれども同じ太子へ交るべく、御伽を勤むれば、若しやと案じ言ひ聞かすれば、何とぞ三人の心を一つにして、睦まじく太子を守りなば、發心の御望みある太子も、御心を此の宮に留め給へば、上は更なり下萬民、卑しの末の者までも、天下國土の豊けきを、悦ぶ時も来るべけれ。若しさもなく皆々が、嫉妬深き事もあらば、太子の御胤は勿論、折々毎の御伽も、程なく愛想を盡かされて、御側をば退けられ、淺ましき女と人々に、後指をさよるべし。爰に能く心を着けよ、假令面は優しくとも、嫉妬の心ある時は、黒髪も蛇となり、提子の

水も湯と湧き變れば、窺みても尙察みたきは此道の戒めなり。皆召仕ふ女どもへも、我が主人の威に誇り、彼方此方の姫達を、蔑ろにする事なく、三世の縁を結ぶとも、朋輩の間睦まじく、交際ふ様に言ひ聞かせよ」と、細々なる諭し言に、姫達は、轟々と胸に應へて差俯向き、忍び涙の外ぞなき。一間を隔ちて控へたる、三人の姫の附人は、不斷の心荒々しきに、恥ぢて漏れ聞く身の辛さ。暫し言葉も無き折から、轡發彌は三人の、姫を厚く勞ひて、身の暇を給はりければ、皆それらに別れを告げて、總て部屋へぞ歸りける。されば其年も過ぎ、太子の御年はや、十六歳に成らせ給ひ、御装ひ殊に麗はしく、お伽にかしつ傳く姫達は、何とぞ我れ逸先に、御胤を懐胎して、持て囃されんものと巧みつゝ、隈陀彌女の方にては、太子の御慰みに托せて、數多の小禽を集めつゝ、是を標干に並べ置き、太子の御入りを待受けて、残らず籠の内より放てば、小鳥は嬉しげに、羽揮ひしつゝ、此方那方へ飛び巡りて、友呼び交はす是にさへ、

月下氷神の在すかや、羽色に愛で、追廻はし、睦まじく嘴を契る、夫婦りさへ何となく、媚めく小鳥の有様に、皆々心を空にして、計らず興に入りたるも、これ罽陀彌女がそれとなく、心の願ひ達せんと、神に誓ひの放生會に、善根をして、我先に若君懐胎せん事を、祈る心と知られける。然れば又鹿野女の方には、過ぎし頃より如何にしてか、太子の御通ひ絶えけるを、悲み嘆きて此程は、甚く病うの床に就き、只うとくと身を悔いて、玉の興さへ味氣なく、思ひ煩ひ給ふより、お枕元へ年長けたる、局が朝夕附添ひて、藥など勸めて諫むるやう、「姫君如何ましますや、此程は太子さま、暫し御通ひは遠ざかるとも、此方にさへお變りなく、赤心をもて明暮に、太子をお慕ひ遊ばさば、其の眞實を神佛も、必ず感納まし〜て、今にも太子の御通ひ、あるべきは知れてある。若し其時はお惱みにて、姫には如何遊ばすぞ、兎角御心を取直し、浮々と遊ばせば、病氣平癒疑ひなく、それにつき私風情が、物知り顔に侍れども、辱き聖

が言ひし事に、抑も彌陀の五佛とて、阿彌陀、觀音、勢至、地藏、龍樹を深く御信仰遊ばせば、病氣平癒も疑ひなしと、兼てより聞き侍れば、此の五佛を御信心ありて、お藥を召上らせ給へ」と涙含みて申しければ、鹿野女もやから枕を擦げ、浮む涙を御袖にて、掻き拂ひつゝ宣ふやう、「オ、宜うこそ案じてたもる。此程から和女を始め、皆の者が氣を痛め、心を盡しての看病、さぞ分らぬ女子ぢやと、蔑みもあらんなれど、自らとて見る影もなき身の、斯くまで難有き出世を省みて、苟且にも太子へ悋氣がましき事無きやうにと、心を責むるが高じ〜て、思はざる此の煩ひ、今より和女が語りたる、御佛を祈りて平癒を願はん」と、宣へば、局は尙摺寄り、「其の五佛の内にも觀音は、三十三身に分身まし〜する中にも、千手に變じて地獄道の三障を破り、正觀音と變じては餓鬼道を救ひ、馬頭と變じては畜生道を助け、十一面と變じては修羅道を救ひ、準提觀音と變じては人道を助け、如意輪と變じては天道の三障を破り給ふ。

是を則ち六観音と申し奉る」と、事細やかに述べければ、鹿野女は聞いて黙頭  
き給ひ、「成程く、観音の誓ひも誠に難有く、五佛の内何の御佛でも、誓ひは  
凡て尊けれど、地藏菩薩は自らの、身代りに立給ひし事も在すれば、先づ此の  
報恩を誓ひ、父母の菩提をも、弔ひたきと心には、東の間も忘れやらねど、何  
を云ふにも宮仕への身、只思うたばかりで、徒に月日を過ごしぬる、是のみ  
心に懸り侍り」と、啣てば局父言ふやう、「こは然程に思召さば、早やく地藏  
を信心遊ばせ。此の御佛は殊更に、女子を守らせ給ふとかや。抑も地藏に十種  
の福と申して、第一に女人泰産、二つには慈樹具足、三つには取病疾除、四つ  
には壽命長延、五には聰明知慧、六には財寶榮愛、七には愛敬、八には米  
穀成熟、九には神明加護、十には大菩提を證すと申せば、此の御佛の名號を、  
千遍唱へて小さき紙一枚へ認め、是を千枚認むれば百萬遍の功德にて、則ち海  
や川へ流して、果敢なく果てし、無縁衆生の、亡者の爲に、施餓鬼致して遣

はす時は、其の名號の功力にて普く、成道を遂げて、安樂國に生ずる故、此  
上もなき大善根。然れば其の行者たれば、貴女様の御病も癒え、遂には太子  
の御胤宿し、御壽命長久の基、殊に承れば太子さま、九心の御時の事かとよ、  
辯頭覽の院へ遷らせ給ひし時、仇し野にて既に早や、御最期とも成る處を、優  
陀夷夫婦が地藏菩薩か、一筋に信仰せし故、薩埵の誓に御命も恙なく、十善天  
子の若君と、芽出たく御繁昌遊ばさるれば、今より其の御誓ひ、一早やく思  
し立ち給へ」と、最く勧め参らすれば、鹿野女は自ら氣を勵まし、漸くにして  
起上り、身も硯も清めつゝ、やをら机に打向ひて、地藏菩薩の名號を、千度唱  
へて一枚認め、目を重ねて思ひの儘に、既に千枚認め終り、「是にて百萬遍の功  
徳なり。早く川へ流すべし」とて、自ら手箱へ詰め給ひ、お側お次を勧めぬる  
女中へ使ひを仰せ付けらる。然ればお使ひの女中達は、外珍らしく悦びつゝ、  
供人召連れ廻毘羅城を、急ぎ立ち出で、最寄なる、川の橋へ赴きつゝ、携へた

る彼の名號を、手にく取りて一握りづゝ、亡者の爲に施すとて、流れに向ひて投げ放てば、川風に靡き飛ぶ有様、宛然時ならぬ雪かと計り、愛で取り離す人もあり。又物に慈悲ある人は、此善根を深く愛で、俱に佛心を起すもありけり。开は扱置きて茲に又、月景殿へは轡登彌の、徒然を慰むる、腰元どもが戯れて、笑ひ備す折からに、お庭の扇を叩く音、皆々は聞耳立て、聞けば正しく男の聲音、こは何者と女中達、四五人立ちて欄干より、庭下駄穿いて立出で見れば、儼がましき一人の雑色、白丁烏帽子をかけたまぐも、畏き雲井の御庭口、殊に奥向、男禁制の掟を破り、來たるは曲者、取逃がすなと各自が、早くも薙刀押取りて、馳せ行く威勢に件の男、多寡が女と侮りしも、怯みたりけん後退りするを、年齒なる女中詰寄つて、「ヤア其所な曲者、逃ぐるとも逃さうか。御前間近く入り來りしは、若し喪御門を守る、新參の雑色にて、不案内故踏迷ひ、此所とも知らず來りしか、但し又様子あつてか、何にもせよ返答次第、阿

容く〜と活けては返さぬ掟なり。イザ有りやうを白狀せよ」と、最とも厳しく責め問へば、流石の男もおづ〜と、砂に坐を組み、取圍ひし、女の怒りを看めんと、手を上げて答ふるやう、「イヤこれ女中方、騒ぐまい、噪ぐまい。我等は雑色とやら合式とやら、云ふやうな者では無い、遙か以前の事なるが、淨飯王位に即き、千五百人の宮女を、抱へられたる其内にて、好容夫人と呼べるは、現在の我が妹なれば、越方より度々逢ひに來たれども、四の五の言うて逢はせてくれず、死んだ事やら達者やら、更に便宜も分らぬ故、思ひついて南門の、番人に酒飲ませ、烏帽子白丁を假初の、衛士に紛うて來たからは、淨飯王に逢はぬ内は、歸らぬ〜。早く取次いで逢はせてたもれ」と、投げ出すやうに言ひけれど、女ども更に聞入れず、各々互ひに目配せして、追ひ退けんとする後の方、「ヤレ暫し、女ども」と、轡登彌の方欄干へ、出で給ひて宜ふやう、「如何に其者此方へ近う」と、呼ばせ給ふに女中達は、打愕きつ目引き袖曳き、

手持無沙汰に見えける内、橋臺彌は件の男を屹と見て宜ふやう、「そも汝は何者ぞ」と、尋ねらるゝ言葉の下、是こそ兼て聞及びし、橋臺彌なるべしと、男は膝を突き直し、「我等は淨飯王の山縁の者、此所まで來りしは外ならず、些と頼みなき事ある故」と粗忽の言葉を聞兼ねて、女中達口々に、「安な下郎の分際にて、忝けなくも十善天子の、山縁の者とは粗忽千萬、憂き目を見せん」と立覚るを、又橋臺彌支へ給ひて、「如何にも女どもの申す通り、山縁の者とは聞き捨て難しのそれなる下司先づ包み隠さず、仔細を語れ」と宜へば、「ハテ最前も言ふ如く、好容夫人の兄なれば、遠慮せず此所まで」と、言はせも果てず橋臺彌、「成程思へば過ぎつる年、千五百人の宮女をば召抱へられたる其中に、好容と申すは妹摩耶の、腰元でありけるが、摩耶夫人逝去の後、青龍殿の女子どもは、上下の差別なく、皆々紀念を賜はりて、御暇を下されたるに、好容のみ宮中に残り居る因由なし、辻棲合はぬ事申すと、憂き目見するぞ」と叱り給へば、

彼の男は似非笑ひ、「ハ、ア此方は、まだ何にも知らぬのぢやな」、「知らぬとはそりや何を」、「サア知らぬが佛に語り聞かすは、いかい罪になるけれど、言はれば此方の頼みを聞くまい。必ず〜我が口から、聞いたとは言ふまいぞや。今言はれし如く摩耶夫人の、腰元を勤めたる我が妹、いつの間にやら淨飯王の情を受け、雨風たれぬ戀の海に、夜なく忍びて曳く綱の、いとし可愛の積りてから、摩耶夫人逝去の後、女中残らずお暇出たれど、好容夫人只一人、此の月景殿の南の臺、破利舍那殿へ移し置き、わりなく通ひ給ひし故、此頃安々と太子を産み、名を羅達太子と申しつゝ、優陀夷の悴榮特を、是に附置るゝ事迄、我詳らかに知りたる故、妹の縁に結ばれて、淨飯王の山縁の者と言ひたるが、誤りか。是言ふからは莫大の、褒美の黄金取らねばならぬ。サア黄金を」と手を差伸べ、何の遠慮も荒男の、言葉を篤と聞給ひ、始めて曉る橋臺彌、扱はとばかり打點頭き、忽ち言葉を更めて、「如何にそれなる漢、下司下郎と見侮



りしは此方の粗忽、和主が願ひ、逐一に開届けたり。然りながら其體にては、假令帝に由縁あるとて、現はに披も成り難ければ、先づ今日は立歸りて、此後衣服を更めて、それらの供も召具し、表向き参内あれ、其時は自らが、帝へ執做し参らせて、黄金は恩か一廉の、國王にも取立てん。此儀得心あるならば、少しも早く歸られよ」と、理の當然に込められて、再び返す言葉もなく、然らばと應へて件の男は、元の道へと立歸る、後見送らせて轎疊彌、一間の内へ入り給ひ、本意なき様にて宜ふやう、「今日と云ふ今日思懸なき、よしな事を聞侍り、心に懸る一苦勞、豈夫とは思へども、過ぎし頃より帝の素振、御通ひの絶えたるは、實にもと思ひ計らる。若し然る事もあるならば、帝は隠し給ふとも、優陀夷夫婦命婦等が、密かに告げてくれべきに、我に包みしは情なし」と、啣ち涙に暮れ給へば、居合はず局開兼ねて、「其のお恨みはお道理様、手前なども然る事は、未だ夢にも聞侍らず、思へば聞えぬ帝のお心、儉い

は好容夫人よ」と、心を汲みての執做を、聞くより轎疊彌は局に向ひ、「ソリヤ和女は何言ふぞ、帝は扱置き好容をも、自らが何で恨まうぞ、無き事にてはあるまじきを、聊か苦しかられども、斯る事の在すなら、疾くより明かし給はれば、假令太子御誕生ありても、其時々御祝ひも、我逸先に計らひて、宜きが上にも宜きやうに、育て申すに然はなくて、深く包ませ給ふを見れば、此後とてもさぞやさぞ、妾に愛想が盡き給ひ、後護き事し給ふべし、兎も角も事の實否を、聞きたし」と、宣へば、局は尙も進み寄り、「それこそ最と易き事、過ぎし年摩耶夫人の、供御の役を勤めし女、御逝去の後お暇出で、今では鞆造りの夜又軍士とか、云へる者の女房となり、名を吉祥と呼ばれ侍りて、女の業に小間物類を商ひ、此御殿は勿論の事、破利舍那殿へも赴く由、此者に密かに頼み、事の虚實を承はらんと、云へば轎疊彌、眉を縞め、「如何にも其の女は、妹がまだ存生の折、一二度逢ひたる事もあり、若し近き内來たならば、此方へ密やか

に呼び寄せよ」と、仰せを聞きて局は畏み、彼の吉祥が来る日を、指折り數へて待つ程に、何心なく吉祥は、戀の重荷に引易へて、世帯の煙細ければ、女ながらに重荷を背負ひ、其所此所と駈け歩き、心に染まぬ世辭道従も、世渡る業と部屋々くの、目を覗いて残りなく、暑さ寒さの捨て言葉に、待焦れたる彼の局は、それと見るより呼び入れつゝ、廳で御前の首尾を伺ひ、轡曇彌の御居間へ、弱かに案内せし程に、轡曇彌は吉祥を、近く召されて破利舍那殿の、右様を詳しく尋問ひ給ひて、又御心のあり丈を、頼み聞え給ひつゝ、此日は身の暇賜はりける。それよりして局役に、召使はれし件の女中を、遽に老女格に引上げられ、これまで深く睦み給ひし、優陀夷夫婦命婦まで、何となく御機嫌に合はず、餘所くしき御舉動となりける故、件の人々、それとは知らず、如何なる事の在するかと、心に案じ暮らすも道理なりけり。

去れば又、破利舍那殿の、好容夫人と申けるは、初めは青龍殿なる摩耶夫人の

腰元を勤め在せしが、髮容から様はづれ迄、淨飯王の御意に適ひ、折々の御戯れ寡り、漸次に御不憫彌増して、遂に此所へ移され給ひ、此程太子を請けつゝ、御名を難陀太子と呼ばれ給ひ、御年既に三歳にて、殊に智慧賢くまし、帝も一入愛で給へど、如何なる事の、在しますにや、轡曇彌の方、御親族へも、御誕生の御披露なく只お伽には優陀夷の悴、槃特一人を附けられて、好容夫人の召使とて、僅かに附け置き給ふ故、乳母の心は心ならず、同じ帝の御胤にても、摩耶夫人の産み給ひし、悉達太子の御威勢は、人の敬ひ一方ならず、現在の弟君は、日陰の花の如くにて、何となく乳母までが、肩身狭きは疎ましと、唧つ中にも浮かれ居る、槃特は生れつき、愚かなれども柔順しく、難陀太子に傳きて、御意に背かず従へば、太子も又槃特ならては、常に友とし給はず、隔てぬ間の戯れに、太子槃特を御膝元へ召し給ひ、「コレ、其方が名はなんと云ふ、明かまほしや」と御意あれば、「又しても太子さまの、もどかしい事お尋ね遊ばす。私の名はあ

のものぢや「サア何とぢや」と責め給へば、顔赧らめて頭を掻き、差詰まりしを見給ふより、「又忘れたか、其方が名は、槃特と云ふのぢやぞ。今度は必ず忘れまいぞや。シテ其方が父の名は、覺えて居るかサア何うぢや」、「ハイ／＼覺えて居りますとも」、「ホウ何と云ふぞ」、「父様と申します」と仇なき答に、太子を始め乳母まで、笑ひ催し、高壁に、好容夫人も立出て給ひ、「このう槃特、度も、教へたに最う忘れてか、其方が父の名は優陀夷」と、聞くより槃特打首背き、懐中より書留帳を取出だして繰り開き、那方此方を讀みて見て、「成程父が名は優陀夷、私の名は槃特、太子さまは難陀さまと、皆書き記して置きました」と、阿呆ながらも辛酸なる。折から西に入りかゝる夕日欄干に差込めば、打開きたる座敷の内へ、居合す人の影法師、背丈も長く疊襖へ、映るを見るより槃特は、はツと愕き立噪ぎ、「こは化性の物の來りし」と、逃ぐれば、附添ふ己が影、彼方此方へ走れども、尙附纏ふに敵はじと、手を振上ぐれば、彼方でも、齊しく

上ぐる手の影に、愈々恐れて、居合はしたる乳母に取着き泣出だせば、乳母は可笑しき懐へ兼ね、思はず聲立て笑へども、ゞ槃特が心の怖さは、然も有りなんと取敢ず、障子を端と閉切れば、槃特は溜息つき、「アラ嬉しや、曲者は何所へか失せた」と座に坐る。折から彼の吉祥は、いつもの如く小間物の、品々携へ部屋ぐくを、廻りて此所へも來りしかば、好容夫人の許しを受け、懸てお居間へ進み入り、何吳となく御覽する内、幸ひ四邊に人もなく、宜き折を見て幡曇彌の、お文をそつと差出だせば好容夫人は打驚き、「それは誠か難有や、斯くお文まで賜はりて、睦び給ふ忝けなき、疾く拜せん」と封じ目を、切りて篤くと見る程に、始よりして細々と打解け給ふ文牒にて太子を此の方へ伴ひて疾く見せ給へなど細やかに、書き認めてありけるを、讀終りて吉祥に向ひ、「如何にも此のおん文のやう、自らが心には、飛び立つ程に嬉しけれど、帝を差置き、月景殿へ、太子と俱には參られず、今にも帝入らせ給はゞ、此の御文を御覽に

入れ、御許しを受けてこそ、直ぐ様太子諸共に、御目見得に赴くべければ、それまでの處は悪しからず、取締ひてくれよかし」と、頻りに喜ばしき體なる故、吉祥も俱に嬉しきを、袖に包みて退きつゝ、其儘川景殿へ赴きて、好容夫人の御悦び、云々なる由申上ぐれば、轡登彌、「それは何より嬉しやのう、さらば今より誰にも沙汰なく、破利舍那殿へ赴かん」と、仰せあれば既に早や、日も暮れたればと中老の、女中が留め参らすれど、「少しも厭ふ事は無し、自らが思ふ仔細あれば、更々案じず供せよ」と、遂かに夜の御運び、只中老一人召連れて、破利舍那殿へ赴き給へば、好容夫人は難陀太子に添乳して早や寝れ給ひし、部屋とせの扇を叩くは誰そと腰元が開けるを遅しと、立入り給ひて轡登彌、其の腰元に打向ひ、自らは轡登彌なりと、仰せらるゝに打愕き、思はず平伏すを押し止め、「イヤ愕く事はない、自ら此所へ来る事、前以て知らせなば、何や彼や手重くて、皆さぞや心遣ひ、然れば此の由好容に傳へて、寝間衣の儘にて苦しかられば

一寸逢ひくれよ」と言ひ聞けて、言葉優しく宜ふより、腰元は好容の枕頭へ走り行き、云々の事告げ申せば、好容は打愕き、夜のもの掻い進り捨て、「着更への小袖早や持て」と言ひつゝ、亂次なき姿にて、太子を抱き上げ起きんとするに、早や轡登彌は入り來り、打解けたる氣色にて、「イヤこれ何も夜の事、衣服を更むるにも及ばず、太子も寝れたら其儘で」と、訝ひつゝ徐々好容の枕の元まで進み寄り、「如何に久しや好容夫人、不時に來りてさぞやさぞ、不審にも思はれやうが、更々訝る事勿れ、今日文をもて申せし如く、疾うにも逢ふべき筈なれど、如何なる事の理ありてか、帝を始め優陀夷夫婦、命婦等までも其方の身上、太子御誕生の事をさへ、妾に包みしものからに、さぞおことにも心憂く、思はるべきかと推せし故、自ら訪ひに來りしのみ、心安く思はれよ」と、情も深き御言葉、聞く好容は我から恥ぢて、赧らむ顔を得も上げず、消えも入りたき其舉動、轡登彌は尙打解け、好容の抱きし太子を熟々見て、「それなる和子

は兼て聞く、難陀太子に在ますか、テモ麗はしき御粧ひ、此方へちやつと抱か  
せてよ」と、手を差伸べて抱き取り給ひ、太子の顔に顔をつけて、あやし給へ  
ば、目を覺まし、莞爾と笑み給ふより、橋臺彌もいと愛で給ひて、餘念も無  
き有様に、好容も難有涙に暮れて、只言葉もなく差俯向いて居る程に、橋臺彌  
は太子を抱き、暫く時を移しけるが、如何にも別れ惜しげにて、「今宵は我に貸  
し給へ」と、宣へば好容は、はつと應へて乳母を添へ、「何とぞ暫く和女さま  
に、御養ひ下さらば、尙難有き仕合せ」と、怖々申せば橋臺彌、「さらば此儘連  
れ歸らん、和女も何憚らず、折々此方へ來られよ、今宵の無寐許し」と暇乞  
して出で給へば、好容は又平伏して、「お粗末さま」と言ひつゝも、送り出でん  
としてけるを、橋臺彌は甚く押止め、太子の乳人引連れて、月景殿へ歸らせら  
る。然れば其の明の日に、早くも此事帝に聞え、殊に又優陀夷夫婦、命婦等は、  
彼の母子の事、是まで包みし面目なき。橋臺彌の御前へ、出づる事さへ最と辛

く、互ひに顔を見合せては、本意なき由を語る内、優陀夷夫婦命婦まで、橋臺  
彌の御召と、聞くより扱はと胸に釘、先づ逸先に優陀夷が出で、若し兎や角と  
あるならば、包み隠さず有りの儘、申上ぐる外なしと、少しも憶せず御前へ、  
出づれば橋臺彌は難陀太子を、是見よがしに抱き給ひて、「こは久しやのう、優  
陀夷、此の太子を見知りしか」と、差出だし給へども、優陀夷は何の應も無く、  
差俯向いて居たりしが、良有つて頭を上げ、「御前さまへ是まで包みしは、重々  
我々が無念なり」と、言ひ解かんとする先を、橋臺彌は押止め、「イヤ其の言譯  
を聞く爲めに、是へ呼び出しはせず。假初ならぬ若君の、御誕生在ませしを、妾  
へは勿論の事、御親族方を始めとし、國中残らず沙汰すべきに、未だ其事無き  
故に、それを急げと申さん爲、只今呼び出だせしなり」と、心の恨みを言葉に  
濁し、それとなく戒めつゝ、仰せあれば優陀夷は畏み、是よりして難陀太子の  
御誕生を、それ／＼へ御披露となりける故、御親族方は勿論の事 殿上殿下の

人々より、種々の獻上物、大殿に山を爲して、御祝を催せらる。然れば優陀夷の女房、命婦も俱に、橋登彌の御前へ、怖々と進み出て、好容夫人太子さま、御誕生の事の由を、包みし事の申譯、恐入りて詰ひければ、橋登彌も一通りは、叱り給へど、然のみ又、執念くは恨み給はず、御祝の日よりして、好容夫人を表面向、月景殿へ召出だされ、何や彼と睦まじく語り給ふに、附隨も心安くは思へども、御祝の日よりして、帝は更に月景殿へ、通はせらるゝ事もなく、好容の方へも入らせられれば、これ只事に侍るまじと、優陀夷、帝の御前に出で、御心の内を問ひ參らせしに、案の如く橋登彌、破利舍那殿へ沙汰もなく、訪れしのみならず、難陀太子を誘ひて、月景殿にあるものから、流石に磨とて面伏せ、何を機に顔合はせん、返すくも本意なき事、誰が計らひて橋登彌の耳に入れしぞ、其者の、名を聞かまほしと啣ち給ふに、優陀夷は平伏し、「如何にも其の御仰せは、御道理には候へども、秘す事は必ずしも、顯はるゝと云

ふ比喩の如く、誰言ふとなく、風が便りにするものなれば、然のみ御心に懸け給はて、幸ひ御交情睦まじき、好容夫人の事なれば、相も變らず御通ひありて、太子の御身の上何異と、語らひ給は、橋登彌の方も、然のみ恨みも宜ふまじ。是非とも御入りあれかし」と、那方を思ひ、此方をいとひ、漸くに帝を勸めて、月景殿へ誘ひしに、橋登彌は帝を敬ひ、戀て四邊の人を遠ざけ、帝へ向ひて宜ふやう、「如何に我君聞し召せ、自らが過ぎし年、妹が懐胎の頃なるが、心に如何なる、天覽波旬が魅入りてか、罪もなき摩耶を深くも妬みつゝ、あられもない事仕出だせしが、不圖其の惡念發起して、それから深く窺み慎みて、苟且にも妬み心を捨てたるが、昔一度不束なる、僻事ありし者なれば、此程好容夫人の身の上を、お包みあるは無理なられど、然のみ執念く自らを、嫌ひ給ひて在しては、此方にて兎や角うと、心を盡す甲斐もなし、最早やお伽も是まてなり、許し給へ」と涙ながら用意の短刀逆手に取り、「疾くより覺悟は極め侍り、

女の髪の愛でたきも、誰を頼みに結ぶべき、君の心に適はずば、少しも早く態を變へ、尼法師にも成り果てし、煩惱の絆を斷ち侍らん」と、言ひも終らず手づからに、髪を解かんと仕給ふを、帝愕き押し止め、「ヤヨ暫し待ち給へ、磨が心に何事も、隔てんやうは無けれども、好容夫人の身の上を、和女に明かさぬものからに、恨みらるゝは然る事乍ら、只今和女の懺悔の如く、女子と云へば誰々も、妬みの心あるなれば、若しも其等の淺ましき、事もやあらんと疑ひて、秘せし事は許してよ。然れば是より太子をば、和女のものゝ養育し、又好容と睦まじく、親しみ給はゞ如何ばかりか、磨が心の悦びぞ。早や／＼心を取直し、酒事にて備し給へ」と、最と懇ろに諭し給ふ。言葉の機に橋臺彌は、啣ち涙も今更に、添け涙を掻き拂ひ、「ア、勿體なや冥加なや、果敢無い心に恨みし事、幾重にも御許し、御免なされて下されかし。仰せの如く難陀太子を、此方へ移して自らに、養育せさせ給はらば、自らが下々への、聞え悪しからず侍るかし。

斯程まで厚きお恵みの御心に在しませば、よも此方をば恨み給はて、是までの事共は、打捨てし、此の後は、必ず／＼隔て給はて、お目懸けられて給はれかし」と掌を返すより、早くも心打解け給へば、帝もいと御色よく、遽かに御酒宴を始められ、其夜は媚めく語らひに、わりなき枕を並べつゝ、如何なる夢をや見給ひけん。烏羽玉の羽色になりて可愛いと、鳴いて渡れば可愛くて、鳴かぬ鳥の月の夜も、慣なくして戀の闇、夜明けぬ國のいつまでと、男持つ身に明けの鐘、聞くも辛しな家鶏の、野暮な口から後朝は、ほんに遣る瀬が無いわいな、獨り寝る身の夢でさへ、ほんに遣る瀬が無いわいなと、腰元どもが口々に、氣も氣散じに浮れ蝶、唄うて通ふ長局は、女護の鳥かと疑はる。折から周章しく腰元一人、奥の計所へ走り來て、優陀夷の女房に打向ひ、「只今お玄關先へ案内して、おだ見知りなきお客様の數多の供立にて御入と、知らせを聞いて優陀夷の女房は、「お開は誰殿の御入りか、先づ是へ御招待、粗忽なきやうはか

らばれよ」と、言付け遣はす程もなく、儼がましき武士の、長袴を踏みざわめかし、大小門くわんぬきざしに差こなして、案内に連れて打通り、上座じやうざに直れば優陀夷の女房、禮儀正しき挨拶に、件の武士咳しはよきしつゝ、「某は好容夫人の兄、夜叉軍士と云ふ者なり。先づ以て此度難陀太子このたびなんたたいし、御誕生の御披露を、人傳手に承はり、何より以て珍重の儀、依つて其の御慶おんよろこび旁々、橋松彌の方へ面談の上、淨飯大王を始め悉達太子、難陀太子へも近づきの爲、是まで推參致せり」と、然も横柄わうへいに述べければ、女房は不審の頭を傾け、暫し何の應へもなく、心の内に思ふやう、是れまで遂に名も聞かぬ、武士なれど、如何にせん好容夫人の兄とあれば、此儘にも歸されじとて、「暫くお控へ召されよ」と、言ひつゝ退き一間へ行き、橋松彌の御前へ出て、云々の由を申せば、橋松彌首肯うなづき給ひ、「成程、其者を其方は知らぬ筈、自らは一度對面せし事あり。定めて今日來りしは、願ひ望みのありての事、只今帝お目覺め給はゞ、彼が身の上逐一ごとくに、自らが申上げん。暫

くそれにて遇せしとの、仰せに女房ハツとは言へど、如何にも不審の者なれば、好容夫人の居間へ赴き、云々の由尋ぬるに、好容夫人は打愕き、「成程妾に其名を呼ぶ、一人の兄のありけるが、幼きより、心邪ねぢけ、善からぬ事のみ働いて、多くの人を惱ます事、度重なりて兩親の、意見も更に用ひねば、彼の身齡廿歳としはたちの頃、永く勘當致してより、久しく噂も無かりしが、過ぎにし頃、人に聞けば、着る物さへも肌薄き、鬘樓つづれを纏ひて彷徨へど、まだ心をば取直さず、人を損ねる身の放埒はうちつ、其の善からぬ沙汰を聞く度に、兩親はあらぬ涙、生れ損ねし子を持つて、世間を狭く身を詰めて、老の苦勞も那奴故と、恨みでは泣き、悔いては泣き、又は世間に非業に死せし、人ありと聞く時は、若しや那奴が業では無きかと、案じては泣く親心、此頃妾も心着き、提婆の家來に若しや又、成りはせぬかと案ぜしに、只今のお言葉に、大小手挟み衣服正しく、供人召し連れ來りしと、聞きて少しは落着き侍り、只一人の兄上を誹るは悪しき事ながら、



善からぬ者に候へば、程よき様に言ひなして、帝を始め橋本彌の方へも、御紹介せは御無用なり、若しも後日に如何様の、事も出て來し其時は、自らも親も面目なき儘、此儀宜しく頼み入る」と、事を分けたる利發きに、女房も然こそと首肯きて、「然あらば宜きに計らひ申さん。必ず案じ給ふな」と、言ひつゝ、懸て橋本彌の、御前へ出づれば此にはや、彼の者に御面會の色めきあるを、先づ押し止め、好容夫人の物語、云々の由詳らかに、告げ知らせ參らすれど、橋本彌は好容の、現在の兄と聞きて、「假令好容はそれにもせよ、自らが打捨て無下もなく、歸してやらば人誹りて、我名を下すが愛しや辛し、太子まで擧げし者の兄とあらば、相應の恩賞與へ得さすとも、然のみ帝の御叱り有るべくとも思はれず」と宜ふを女房は、「先づ兎も角も私に、御任せ下されよ」と、無理に押し止めて退きて、軍士の前へ再び出て、「是は、其方様には、いかいお待遠さまや。折悪しく今日は、淨飯王橋本彌、聊か勝れ給はれば、お寢間へ引籠り在す故、

御對顔なり難き儘、私より御參内の御挨拶、宜しく申せとの仰せなり」と、述ぶるを待たず夜叉軍士、頭を左右へ掉り立て、「ハテ姦ましい女の嘴、言はば此度誕生の、若の爲には己れは伯父なり。其者を餘りと云へば、輕卒の扱ひ心得ず。尤も過ぎし頃、不圖橋本彌に面會の節、又も參内致せし時は、莫大の恩賞あるべく、一廉の國王にも封すべきとの確かな言葉、今更反古にも致されまい。先づ面會は兎も角も、此返答を聞きまし」と、眉毛動かす高聲に、女房は甚く持て餘し、「其等の事も此方より評議の上にて沙汰せん」と、賺ほど更に聞入れず、「イヤ面倒な、橋本彌に直談せん」と、携へし菓子折提げ、刀追取り立上つて、一間へ行くを、無理に留める襖をば、無理に引開け入らんとする、途端に入り來る優陀夷大臣、右侍士太郎に包みを持たせ、「イヤ待たれよ夜叉軍士、則ち帝の御名代、優陀夷是にて面談せん」と、言葉凛々しく述べられて、地體は弱き下司の本性、怖々元の座に復れば、優陀夷重ねて言葉を正し、「此度

若君御誕生の御慶びとして、自身の參内、帝にも御満足、某より其の挨拶、宜しく申せとの事、即ち是なる一盃は、淨飯王より其許へ、贈らるゝ時服一襲、些少ながら受納して、歸宅せられよ」と言ひながら、差向けられて不足顔、「イヤこれ優陀夷どの、苟且ならぬ此度の御祝ひ、是しきの禮物を、貰ひに參内は致さぬ。妹が縁にて親族となれば、帝を始め太子までに、盃の取交せもありたる上にて、引出物には一廉の國の王にも取立てらるゝ筈の處、多寡が時服の二つや三つ、欲しくば此方から贈るべし。然に目が眩れ參内はせぬ。信實を以て來たからには、贈物は受取らぬ。帝へ面會が叶はずば、太子方へ逢はすべし。若し然る事もなかりぬとあらば、妹好容を引連れ歸る。いざ、二つ一つの返答は、如何てござる優陀夷どの」と、最と荒々しく言ひけるを、優陀夷は聞きて嘲笑ひ、「ハチざわめかしい其の願、悪計の尻の剝げぬ先、暇申してはや歸らぬか。長居をしたら物種の、命の程が覺束ない」と、言ひ詰められて心の内、小氣味

悪くは思へども、今更引けては歸られず、何とぞ悪計を調へんと、言葉臆せず又言ふやう、「イヤ聞き憎き其挨拶、悪計の尻の剝げぬ先とは、抑や如何なる言分ぞ」、「然れば其許の目論見を、詳らかに言ひ聞かまん。靱作師の夜叉軍士、退り居らう、退り居れ」と、星を差されて流石に喫驚、然れど面は素知らぬ顔、「靱作りの夜叉軍士とは、そりや誰が事」、「汝までも偽るか、好容夫人の兄なれど、親に永く、勘當され、今では靱師に成下り、下司の營み野山へ出で、猿熊を打捕りて、其皮剥いて活計とする、襖の姿に苟且の、借着の衣服大小に、供人大勢連れたるは、不辨辨れば是に居る、右梵士太郎に見せしめしに、其供人は過ぎし頃、悉達太子迦夷衛國よりの還幸を待伏せして、右梵士太郎と戦ひし、提婆が手下の者なれば、早や腹中の悪計の底を、見極めたるとは知らざるや、まだ化の皮顯はさぬか、こゝな人非人めが」と、睨めつけられて夜叉軍士は、忽ちに齒噛みを爲し、側に有合ふ白木の臺の時服を踏と蹴飛ばせば、包

み解けて中よりは、時服と思ひ懸もなく、軍士が常に着慣れたる、襦袢の小袖顯はるれば、流石の軍士耐り兼ね、「謀るくと思ひしに、何時か此方が謀られしか。早や是れ迄と斬り蒐けたる、刃を優陀夷は引外して、身を交はす間の二の太刀に、右梵士が眞向へ、斬付けんとして、振上ぐるを、あはやと優陀夷後より、腕をしつかと取止めたる。其の隙に右梵士は、差副扱くを見るよりも、優陀夷暫しと押止め、此奴助くる者ならねど、苟且ならぬ好容夫人の、兄とあれば是非に及ばず、只散々に縛めて、追拂ふが可し、ソレ右梵士」と、言はれて盛しき血氣の若者、飛立つ思ひ軍士に向ひ、「ヤイ、汝は好容の、兄とは云へど兼てより、永く勘當受けたる身なれば、親は勿論兄弟の、縁は切れて、今にては、野賊同然の渡世する、其の卑しい心から、私良驥國の持婆太子に與し、此の室中へ姿を變へ、入り込みて瞻太くも、事をなさんとする面、魂、然れど我が帝は聖賢にして、仁心深く在ませば、命を助け給はする」と、言ひつゝ、大小結

刺ぎ取り、取寄せ置きたる件の襦袢を、着せ更へてそが儘に、追出ださんとする處へ、女房吉祥走せ來り、優陀夷に向ひ、手を突きて、「これは私の良人故、何とぞ手前へ御預け、下されかし」と手を摺りて、様々に詫言ければ、幸ひの者來りたりとて、欄干の下へ下げ、優陀夷は右梵士引連れて、御前へ赴く此方には、吉祥軍士の胸元押へ、涙と共に恨み事、「爰な人非人、鬼よ蛇よ、遣にて様子は残らず聞いた。大惡無道の達婆に與し、此様な事とは露知らず、口頃外をば内にして、戻らぬ故此度とて、十日廿日も寄り付かぬを、氣にも懸けずに居た内に、此の有様は何事ぞ、忝けなくも此宮は、妾宮仕へして御恩を受け、又一つには現在の、和郎の妹が結構に、召使はれてある者を、何が不足で此の働き、心直に持つならば、妹の庇護で格別の、お取立てにも違ふならば、私も今の下司の業、さらりと止めて髪容、立派に夫婦で暮らすもの、开も連添ひし始めより、善からぬ心と知りながら、何うした月下氷神たちの、結び合はし

た縁なるか、ついたた機みの酒事に、不圖逢ひ初めてそれよりも、女夫となれば其日から、更に内には落着かず、朝夕貧しき營に、小間物類を商ひて、少しの代に煙を立て、操を立てて居るものを、心強や」と泣き口説くを、軍士は脚倒し似非笑ひ、「ヤア姦ましいいめる」と吠え面、親の意見さへ聞かぬもの、女房は愚か、何奴等が、何と言はうと淨飯王へ、面談せぬ内はいつかな歸らぬ。どりや對面を」と傍に据ゑある、菓子の一箱携へつゝ、襪の姿の共儘にて、奥を口蒐けて行かんとするを、女房は遣らじと支ゆれども、如何て男の力に及ばん。然れども、女の一念力、遣らじ、行かんと競り合ふ内、軍士が持ちたる菓子の箱、水引切れて中よりは、ばら／＼と落ち來る菓子。吉祥は屹と見て、「是が此世の名殘ぞ」と、三つ二つ拾ひ取り、口に入れつゝ尙も亦、怯まず去らず挑み合ひ、遣らじ離せの開が内に、吉祥忽ち手を悶極き、挫乎と坐れば、口よりは、五臟六腑惱亂の、血沙を吐きてアツと計りに、苦しき聲を立てたる

に、大膽不敵の夜又軍士も、コハ敵はじと欄干なる、縁の下へぞ忍びける。とは知らずして、優陀夷大臣、後に續いて右梵士太郎は、好容夫人を誘ひて、立出で見れば、吉祥は、傷者になりて居ける故、こは何故と勦れば、吉祥臨終の聲微かに、あゝ、勿體なや、怖ろしや、此の御殿を汚す罰當り、偏へに許し給はれかし。又私が懺悔する、身の落度の一通り、橋邊彌の御方始め、好容夫人も一通り、御聞届け下さるべし。過ぎし頃良人軍士、大惡無道の達婆方に、興せしとは露知らず、此の宮の何かの御様子、棄物語に根掘り葉掘り、聞かるゝ度に迂濶くと、月景殿の御光景、破利舍那殿の御様子、好容夫人難陀太子を産み給ひし事どもまで、夫と知られば打明て、語り聞かせば其通り、私良摩國へ赴きて、内通したるのみならず、先つ頃大膽にも、月景殿へ忍び入り、橋邊彌の方の御前にて、好容夫人の有様を、口に任せて述べたれば、是より其の御中間柄、帝を始め附隨まで、御不興になりたるも、因を押せば皆私の、口一つ

より出てたる事、其の言ひ譯も何とせん、女の口の善悪なき故と、悔みて返らぬ其の中にも、只嬉しきは橋邊彌の方、奸容夫人と睦まじき、御仲立を致したもものから、一度帝の逆鱗は、之有りとても遂に又、御心解けて芽出度き御交情、我が計らひの事なくば、御痛はしくも維陀太子は、尙いつまでも日陰の御身、是れ程までに私が、思ふに引替へ軍士が心、只一途に達婆に與し、何かにつけて悉達太子の、御身を妨げんとのみ謀りぬる、良人の仇に女房が、心を盡して味方に付き、良人の方味達婆やば、女房が仇と、恨むなる、夫婦の心かほどまで、合はぬと云ふも過世の因縁、妻は夫に従ふの、理を守りて此の宮を、仇にすれば不忠の第一、そののみならず此年來、身の計とは云ひながら、多くの猪獄を打殺し、其の報いは何處へ行くべき。總て夫婦が身の上に、廻り來りて此上にも、如何なる憂き目に逢はん。手づから食うべし此の菓子は、それと悟りしに違ひなく、毒藥調合の品なりき。妾が最期を御覽じて、良人と一つてな

い證據、御推量下されよ」と、理せめてあはれなる、言葉か聞くより、橋邊彌も、一間の内より走り出て、奸容夫人と諸共に、不憫のものと寄添ひつゝ、勦はる中にも奸容は、吾現在の嫂と、始めて聞いて取纏り、「是までは商人の女々と呼びたるも、知らぬ故とは云ひながら、一つは兄の放埒から許し給へや、自らとて、誠に情ない男よと、恨のながらも、血統の縁、切るも切られぬ妹が、コレ此の様に詫びます。のう姉上」と手を合はせ、いと涙に暮れければ、橋邊彌は言葉を更め、「疑ひ舞れし吉祥よ、良人に代つてこれまでに、致せし忠義の志は、山に積むともよも盡きじ。心慥かに持たれよ」と、聞くが此世の暇乞ひ、其の儘其所に息絶えたり。右梵士太郎は軍士の行方、彼所此所尋ねしかども、更に其の影だに見えず、召具したる供人も、何時の程にか逃失せて、一人も残る事なければ、何を擒にする物なく、手を空しく立戻りて、此趣き、又吉祥が事をも具さに奏しければ、帝怒り且つ嘆き給ひて、此の吉祥こそ摩耶

夫人存生の節は何臭となく、怒ろにせし者なれば、其報いの爲且つは又、此度の忠死を賞する爲に、亡骸を厚く取納め、禮を重くして葬るべし。又軍士が悪行は、甚だ憎き者なれば、假令好容が兄にもせよ、何處までも行方を穿議し、召捕へて厳しく糺し、其罪に行ふ事、少しも忽せにする事勿れ。凡て善を勤むる者は、其の志を厚く褒美し、又悪事を爲すものは、厳しく能く戒むるを以て、國を保つ政道の、正しき道と云ふなれば、それぐの者へ申付け、軍士は勿論其の同類、外にも斯る曲者あらば、洩さぬやうに取抑へ、屹と其罪に行へかすと、善惡正しき仰せを被り、優陀夷御前を退きて、直ちに吉祥の亡骸を、怒ろに取り置かせ、是を御菩提所の傍に葬り、また夜叉軍士の行方をば、それぐへ、相觸れて、厳しく尋ねさせにける。めてたしく。

釋迦八相倭文庫

九編之序

夫れ須彌山の南洲を閻浮提といふ。日本、震旦、天竺は皆此中なり。然るに天竺は、其の閻浮提の正中、大國にして王城あり、其の王は釋迦氏也。抑も此國の祖先を尋ぬるに、皆光音天の衆此の地に遊戯飛行自在す、時に香しき甘味を取食ひて、身孕めば飛行すること能はず、食を思ふが故に粳米生ず、長さ四寸半、朝に茹れば夕に生ゆ、是を

食ふが故に、男女の形分る。後日に貪慾發りて苴れば再び生えず、侵し奪ふことありて、智者を選んで國王に定む。名を平等王と云ふ。是より三十三世に至りて、善思王轉輪聖王の位を證して四天下を治む。又百一萬五十六王を経て師子頰王の皇子踐祚す。是を淨飯大王と稟す。今序に代へて茲に是を識す。

弘化五戊申年孟陬吉辰

万亭應賀述

釋迦八相倭文庫九編

去程に破利舍那殿に、淨飯王の忍ばせ置かれし、好容夫人の有様を、思ひ寄らざる夜叉軍士の、さがなき心より輪曇彌の御耳へ入り、一度は恨み啣ちしが、禍非つて幸となり、難陀太子の御身の上も、既に日陰を出で給ひて、時々御祝ひも、輪曇彌の計らひにて、悉達太子の先例に異らねば、淨飯王を始め好容夫人の、御悦び限りなく、難陀太子も輪曇彌を、生の母の如く慕はせ給へば、輪曇彌も亦深く愛して、月景殿に留め置き、更に破利舍那殿に返し給はず、懐き抱へして慈めば、好容は御機嫌伺ひと言ひ做し、口唇くくに月景殿へ至り給へば、輪曇彌は又新宮の兄君、悉達太子の御許へも、難陀を伴ひ訪れ給へば、悉達太子もいと悦び、打解けて語らひ給ひ、又好容夫人へも、厚く言葉を懸けられて、數多の召使を集めつゝ、様々の戯遊び、御慰み取々にて、兄弟の





御間おんまことに睦まじの然よれば月景殿は云ふに及ばず、破利舍那殿はりしやせん新宮の御所に行き通ふ、女中共も互ひに深く睦み合ひ、勇みて宮仕へすると雖も、それに引替へ物愛ものあいきは、悉達太子の伽を勤むる、鹿野いざよひ方置陀彌女おきたみちよ兩人なり。如何程心に心を責めて、れたみがましき志を、我われと窮たしなみ傳かと雖も、素より女の只一途に、君きみ戀しく思ふに付けては、計らずも心の猿ましらに、惑はされざる事を得ず。いつしかに又嫉妬しつと起りて、那方あなたは此方こなたをつい妬み、此方こなたは那方あなたを妬みつゝ、夜の御泊りを争ひて、我れ一先に御嵐おんたねを宿さんものと、むら膳ぎもの、心に妬ねむらを燃やすのから、幾度いくたび如何程の善根功德を凝すと雖も、此の噴志しんしの炎に焼き捨て、其の甲斐なく、却つて身の禍わざはひとも成るべきか、又は妬の其の煽あほ、隠すと爲れど美しき、花の笑顔えがはに自みづから、其の色の顯はるゝにや、悉達太子は只管ひたすらに、耶輸陀羅女の方へののみ、御通おんひ寄りせられ、残る二人は其程それほどに、召給ふ事なかりし故、優陀夷の女房取り扱ひて、此の二人の姫も折々は、御伽に召さるゝやう、様々

に進め参らすれば、太子は異な御顔付おんかほづきにて、兎も角くもとのみ宣ふ故、女房も猶二人の姫の、心を察し味氣あぢきなく思へば、又橋婆彌の御前へ出て、密かに云々なる由を告げ申せば、橋婆彌も亦密かに宣ふ由有り、其の御言葉おんことばを兼て優陀夷の女房、再び太子の御前へ出て、「此の程橋婆彌の方の仰せには、過口いっせうも示し置たる事さへ有るに、如何いかなれば然さまで偏頗かたがちに、耶輸陀羅女のみ、御伽に召給ふぞや。若し二人の姫に、不束ふつゝかなる事しも有らば、包み給はて斯様かやうの事有る故、嫉ひ給ふ、と私へ、仰せ聞け給へかし、それ聞きといて品に依り、兎も角も計らひて、お伽の役を留めんとの事、此儀如何に在おはしますや」と、言葉賢かしく理を責めて、申せば太子は御顔おんかほを、暫し背けて在おはせしが、頁有つて宣ふやう「イヤのう女房、磨かたおちに於て何儀かたおちに耶輸陀羅女のみ、招ぐ事の有るべきぞ、然る故に先に其方そちにも、二人の者も兎も角もと、言ひしは何れも隔てなく、語らふと云ふ磨が心、此の儀を以て月景殿の、御前へ宣敷沙汰せよと、心と口の裏うら

表、それとは知れど女房は、其の儘仰を畏みて、それより後は耶輸陀羅女、鹿野野陀彌は素よりも、深く心に染み給はれば、御伽の夜半は更にまた、樂しげなく在しつゝ、耶輸陀羅女の傳く夜さは、酒の趣も、醜に一入喋めき渡りつゝ、餘所の見る目も目立つ迄、慈愛の程知られける。全く太子耶輸陀羅女の、容貌の勝れたるに、見惚れ給ひし故にはあらず。抑も耶輸陀羅女は、生れながら容顏麗はしきのみならず、親の躰の厭しきにや身を窮みて情なく、人を侮らず情深く、召仕ふ局多聞婢女に至る迄も、心を着けて勦には、餘所の局多聞まで、如何にも優しき善き姫と、噂して取り難し、誰有つて誹る者無き故、自から天道の恵みを受け、斯程に多き姫達の、召されし中に只一人、選り好まるゝ身の冥加とは、あの姫の事ぞとて、皆口々に羨みぬ。扱て耶輸陀羅女の妙齡も、水の出花の色盛り、翠帳紅閣の、わりなき御契幾度か、重なる儘

に此程は、御心地例ならず、御病氣にも在ますかと、典藥を召して、御容體を伺はせけるに、御煩ひは思ひも寄らず、如何にも芽出度き御懐胎に、極まつて候と、言上するを聞し召すより、太子は雀躍し給ひて、こほそも誠か悦ばしと、勇み給ふに耶輸陀羅女も、俱に我が身を掻き抱き、太子の御胤身孕りしとは、如何なる神の利益にや、あら冥加なる我身かなと、勇み立ちて優陀夷の女房、命婦へも事の由を、即座に知らせて喜ばば、宮中の喋き大方ならず。是よりしては耶輸陀羅女を、太子の慈愛益と深く、片時も御傍を、放ち給ふ事無ければ、いよく耶輸陀羅女の譽れの勢ひ、旭日の豊坂昇る如くに持囃されて、帝よりも御慶びの御使に優陀夷を遣はされ、橋臺彌よりは優陀夷の女房を以つて贈物下されつゝ、猶仰せ遣はさるゝやう、太子一度十善の位を見捨て發心報謝の道に、只管入り給ふ所なるを、此の宮中に御心留まり、漢乘の位を嗣せられ、政事を知ろし召すは、全く以て夫人達の傳き宜きが故なりき、中にも其

方は逸早く、御胤を宿し參らせし事、國への聞え萬民の喜び、此の上や有るべき、猶心を着けて身を大切に守り、頓て安産の時を待つべしと、細々と御心の程を、女房は述べければ、耶輸陀羅女の心の内、何に譬へん其の悦び、嬉しき儘の御答も、亦赤心をもて述べたりける。然れば其の夜の事なるが、悉達太子は耶輸陀羅女の許へ、御通ひありて打臥し給ひし御夢に、不思議や御枕頭へ、過ぎし九歳の御時、鬘頭覽弗の院にて、番附に訛かされ、囃られ給ひて通ひ馴れたる、淫肆の廊にて言葉を変はせし、傾城の婆須密多女、忽然と襦袢取り現れし、其の姿は以前に百倍して、容貌髮形の華美やかさ、やはか傳く三人の姫も、及び無き其の粧装は、宛ら盛り牡丹花の、筒に一本水を上げ、匂ひ零るゝ如くにて、水際立ちて懷中へ、差入るゝ顔の麗はしき、邊り眩き折こそあれ、頻りに空薫の名香の、馨り薫々と心を動かし、天上の春も斯くやとばかり疑がはれつゝ、夢心に太子は問はせ給ふやう、「如何にそれなる遊女は、昔磨

が九歳の時にや、善悪なき物に訛らかされ、通ひし淫肆の廊にて、言葉を変はせし女ならずや」と、宣ふ聲に遊女は、面を上げて點頭きつゝ、「如何にも仰せ有る如く、自らは淫肆の遊女、婆須密多女と申すもの」と、聞きも終らず太子は又、「シテ其の遊女が此の奥殿へは、誰が免して何者の、案内にて来りしぞ」  
 「然れば誰にも免されず、何者の案内も受けねど、君に語らはん其の爲に、妾が一念の一筋なる、逸る心の誠より、遙々の道をも厭はず、人目の關を姫御前の、大膽なる戀なればこそ、徒跣足、之迄參つて見奉れば、廊へ通ひ給ひし時とは、打つて變りし御姿、御年頃と言ひ艶々と、媚めきし御粧ひ、此程傳へ聞き侍りしに、御伽の姫達も、多く出来させ給ひし由、斯る上は仇なき、自ら如き賤の女が、訪ひ參らすともよもやく、苟且にも御情をば、懸け給はじと心得心を、取り直せども情なや、一度御姿を拜してより、忘れ兼ねたるそが上に、ソレ其時の仰せには、何とぞ正眞の佛菩薩を、拜ませくれよと歎き給ひ、

母君摩耶夫人の御菩提を、弔ひ給ふ御志の、如何にも愛しく思はれて、御望みを叶へ奉らんと、心を盡せし甲斐もなく、變り易きは秋の空、情なき君と諦めても、諦め兼ねて御恨を、述べに之迄参り侍る」と、目に服持ちて啣つにぞ、太子は現に答へ給ふやう、「如何にも其等の事有りたるが、此程心に絶えたる仔細は、一度は母摩耶夫人の、御菩提を弔はんと、憂き身を扮して發心報謝の、道へ立寄りんと様々に焦りしが、爲る事爲す事我が母の、妨げとこそ爲れ中々に、菩提の爲は思ひも寄らず。抑も十善天子の若君と呼ばれたる身に有る事か、扱てなき事か、鬱頭覽の院へ諸方より、納めたる奉加養錢を盗み取り、汚らばしき、契情町へ忍び出で、是はまだしも、鬱頭覽の本尊なる、左りの方に安置せし、藏王如來は閻浮檀金と聞くからに、此の尊體を勿體なくも、土か金かと疑ひて、双に掛けし身の淺間しき、夜叉鬼神にも劣りたる、逆ま事のとひ弔ひに、さぞやさぞ冥土の母君は、磨故に猶苦みを、受け給はんと身を悔いて、其

の言わけに、仇し野の、露と消ゆべき命さへ、又助かりて是迄に、存命へしうついなさ、死ぬにも死なれぬ身の罪障、佛神へ双を當てれば、五逆罪と聽くからに、最早や心の張も切れ、罪も報いも後の代も、忘れ果てたる身の置所、只鬼畜と心得て、假の淨世の假の宿、器を零し、其の水は、再び又元の器へ、戻る道理有る事なし。我が罪科も其の如く、悔んで甲斐なき不孝の振舞、濡れぬ先こそ露をも厭へ、今の此の身の有様は、復有るべき榮華とも覺えず、アラ心易き淨世かな。アラ恐ろしの越方や」と、嘆息つくく、宜ふを、彼の遊女は聞き敢ず、「是は又若君の、御言葉とも覺え侍らず。夫れ此の世界は穢土と申して、萬づの汚れいと多く、又娑婆火宅ともいひて、佛の戒め給ふ世界なれば、斯多の佛菩薩達も、人間、餓鬼、畜生、修羅、天上、地獄、此の六道を免れ、安養の淨土へ、赴かしめんとて、様々に説法し給ふをば、君には未だ知るし存さずや。抑も若君は苟且の、人間にては在まらず、即ち諸佛の結縁して、衆生を

濟度の其の爲に、生れ給ひし御身をば、忘れ給ひし不束さ。過ぎし年より幾度か、天上の淨居佛、姿を變へて君に見え、示し諭せし事どもまで、早くも忘れ給へるか、夢の淨世に心を留めて、耻づる色なく諸共に、臭き身を抱き合ふ、男女の淫樂汚らはしや。只今若君の宜ひし、其の昔、鬘頭覽の院の、奉加養錢を盗み取り、或は藏王如來の像を双に掛けて、淫肆の廊へ通ひ給ひし、不束さに御名を下し、此の上の不孝は無きと、歎かるは實に一々道理に聞ゆれども然にあらず、其の罪科と思ひしも、是皆母君摩耶夫人の、菩提の爲に此の上も無き、大善根にて侍るか。夫を如何にと尋ねれば、是より遙か後に及び、摩耶夫人の再來は、因縁によりて忝けなくも、切利天上に生れ給ひて、帝釋天の後妃と成りて、喜見城に住む事有り。其の時宮殿の扉悉く金色の光を放つべし。這は御身が九歳の時、鬘頭覽の奉加養錢を盗み、淫肆へ通ひ、正眞の佛菩薩を拜し奉らんと、只一筋に世に亡き母を、慕ひて戀慕仰したる功德に依つて、

再來の摩耶夫人が住む宮殿の扉は悉く七寶と成れり。扱て又おことが双に掛けし、藏王如來と申しけるは、おことが前生八千度國王と生れ出て、又襟々に生れ變り、人界に出てたる内、南紹國の巽なる、素摩山の蓮華臺に、藏王如來と現はれしを、切利天上の帝釋天、自ら閻浮檀金を以て作らせらる。かるが故に此の如來は、即ち太子の前生にて、謂はゞ其の身を切り割きても、母の亡き跡を弔はんと、思ふ志有るに似たり。また鬘頭覽の院へ諸方より、寄進せし養錢を、番僧共が盗み取り、其の言譯を免がれんと、迦毘羅城より御寄宿の、太子を賄ひの其の黄金を、僅かばかり並べ置き、故意と太子の盗り給ふやう拵へ置き、番僧等は素知らぬ顔にて、諸方よりの奉加養錢、悉く悉達太子が持ち出でしと、鬘頭覽に沙汰せしものから、鬘頭覽は只呆れしが、太子の淫肆へ持出だせしは、御身に着くべき黄金なるを、御身が使ひ果せしに、何の仔細の有るべきや。科は惡僧共に有りて、太子は誠に此の上も無き、大善根を成し給ふ

なり。然ればこそあれ仇し野にて、既に危ふき御最期を、淨居佛修行者と成り、御命を助け参らせ、其の歸るさの途中にて、又出合ひしを幸ひに、夢の浮世を論し参らせ、別れてより太子には、深く報謝の道に入るべきとは思ひ給へども、人界の塵に妨げられ、十善の位を嗣ぎ給ふ時は、諸佛の願も朽ち果つれば、其後太子藍毘尼苑へ遊覽の時、又も淨居佛現はれ出て、花の散るに托せて老少不定は風前の、燈火の如しと諭せしものを、扱も果敢なく報謝を遂げず、荷且の愛惜に惑はされ、火宅に心を留め給ふか。あら鈍ましや情なし、妻子珍寶身に從はず、子は三界の首枷ぞや、はやく浮世を振り捨て、有七寶池八功德水、十萬の安養の淨土へ赴くべし。斯く申す此の遊女は、衆生濟度の其の爲に、淫肆の跡へ生れ變へて、夜々變る戀衣の、秋は文に宿貸して、故意と浮名を零せども、身は假の夜の假初に、涙は賣れど心まで、浦の男波のさす手をば、夜は引寄せる川竹の、變はる枕の色ならて、柳は翠、花は紅も、さ

ら波立つ、やれ、さつと唄ふ聲々妙なるに、太子は夢の内ながら、目を閉ぢ觀念し給へば、遊女の姿は白象に駕りて、端嚴柔和の粧ひなる、生身の普賢菩薩と拜まれ給ひ、法性無漏の大海には、普賢恒順の月の光り、明かなりと唄ひ給ふ故、太子御目を開きつゝ、餘りに尊く思召し、御手を合せて伏拜ませらるれば、姿は以前の遊女にて、さよら波立つと唄ひ、又現に御目を閉ぢ、心を法界に澄まし給へば、生身の普賢菩薩の來迎にて、目前に紫雲飄舞き、音樂聞え花振り降る開が上に、忉利天の喜見城忽然と現れ出て、世にも妙なる有様に、太子は感涙胸に溜め兼ね、「アラ有難や、忝けなや、是迄遊女と思ひしに、普賢菩薩にて在ませしか」と、猶伏拜み給ふ程に、白象普賢を駕せて紫雲に従ひ、虚空を指してぞ昇りける。太子御目を開かせ給へば、四邊に遮る物も無く、只名香の煙のみ、微かに燦るばかりなる。折から窓の征竹に、埒を出てし雀の聲して、夜はほのくくと明けしかば、耶輸陀羅女は夙く起き出で、

御前を下れば、それぐの者、立出で、御機嫌伺へども、太子は件の御夢に、心の内の遺瀨なき。事明らかにならへ、告げるにも告げ兼ねて、御思案の胸いと苦しく、其日よりして御不快とて、御典薬を招かせ給へば、帝轎參彌の方を始め、優陀夷、光明、兩大臣、右將軍等、其外の大匠達も御傍へ、交はるる相詰め、優陀夷の女房命婦等も、御膝近くへ詰切りて、終日附添ひ奉りぬ。扱て又鹿野女置陀彌女の附隨の女中口々に、耶輸陀羅女の御泊りの、夜より太子の御心例ならず、是は如何にと叫く事、遂に耶輸陀羅女の附の女中の耳に入り、素より女の口善悪なく、早くも耶輸陀羅女に告げしかば、耶輸陀羅女は打驚き、道は思寄らざる事聞き侍る。开も自らの許へ御泊り有りとして、何の仔細の有るべきや、此事聞き捨にもなるまじ、優陀夷の女房へ、云々と言ひ聞けんとて、一筋に案じる胸は女氣の、心細さは常の慣ひ、三度の食事も進み兼ね、思ひ煩ふこそ道理なれ。

爰に又私良摩國の王子、達婆太子と聞えたるは、飽くまで心猛くして、迦夷衛國王の娘、耶輸陀羅女と婚姻の事を、媒妁を以て言ひ渡りしに、此方を嫌ひて、遂に遠國なる摩伽陀國迦毘羅城の、淨飯王の王子悉達太子、婚禮を取結びし事、如何にも口惜くや思ひけん。口頃出入する執作師の夜又軍士は、能く迦毘羅城の様子を知りたれば彼を招ぎ、悪計を企てさせしに、軍士は淨飯王の愛妃好容夫人の兄なる故、膽太くも迦毘羅城へ、姿を變へて入込みしに、案に相違の愛目に逢ひ、既に命も危ふかりしを、兎や角して逃げ忍び、一つの葛籠を奪ひ取り、背負ひて私良摩國へ立ち歸り、達婆太子の前へ進み出で、携へ來りし彼の葛籠を、傍へに下して扱て言ふやう、「如何に太子、尊命の、兼ての大義を仕損じて、辛き命を這々に遁れて只今歸りたり。然りながら迦毘羅城へ、赴きし證には、是なる葛籠がお土産と、出來顔に述べれば、達婆太子は眉を擡め、四邊を見つゝ襖を閉め切り、軍士を膝元へ呼び近づけ、「イヤ軍士、あれ

程迄に、手堅き企畫仕損ずるとは、甚だ以て粗忽千萬、シテ其の様子は如何に  
く、「然れば太子の仰せの如く、衣服大小ひけらかし、乗物に打ち乗りて、  
供人多く召し従へ、華々しく迦毘羅城へ入込み、式の如く好容が兄と名乗りて、  
難陀太子の誕生の賀を祝して、それより淨飯王を始め、轉婆彌へも面會せんと  
思ひし事の空となりて、音に聞えし優陀夷の女房、女ながらも器量勝れて、  
迂濶と奥殿へは案内せず、兎角する内彼の優陀夷は、右梵士太郎を召連れ出で、  
如何なる者より手に入れしや、我が鞆作の貧しき活計に、不斷着慣れし此の  
齋樓を、我が目前に差出だされ、慄然とはせしが、一寸も怯まで、其の色を見  
せれども、那方も痴漢、何事も、早や合點の様子なれば、爲損したりとは思ひ  
しが、切めて仕込みし毒菓子を悉達に食はせ歸らんと、様々謀る其の内に、斯  
くなる事を聞き付けて、我が女房吉祥は、案内を知りし奥殿へ、後を追ひつ  
ゝ走り來て、我が底惡計を言ひ明かし、自ら毒菓子をとり食ひ、御恩を受けし

淨飯王を、仇と狙ふ夫とは、一つでない、其の言譯、又一つには夫の惡事を、  
我が口から現はしては、連添ふ妻の本意ならねば、夫への言譯これ斯うと、血  
汐を吐いて苦しみ死、是を見にける此座の諸人、彼を憐まぬ者も無く、我を憎  
まぬ者もなければ、こは叶はじと欄干より、縁の下へと忍び入り、其所等此所  
等と彷徨ひしが、我を尋ぬる其の嚴しさ。夜更けを窺ひ立出でしに、所も狭き  
長局の、縁先と思しきに至りしかば、差足して、密かに四邊を窺ひ見れば、  
薄燈火なる、燈火の下に一人の腰元、坐睡りて居るを幸ひ忍び入り、在合ふ葛  
籠の中を拂き、睡る腰元引捕へ、聲立てぬやう其の中へ、押込めて背負しが、  
立出づる先知れれども、足に任せて急ぎしかば、陽明門の片側へ出で、此の  
溝壑へ立木を渡し、漸うと遁れ出でし」と、言ひつゝ、葛籠の蓋を取れば、ま  
だ十八九の腰元が、髪も亂れて惱める姿。軍士は出だして勦れども、只潑然と  
泣くのみなるを、漸くに賤しつゝ、太子は言葉を柔らげて、彼が様子を尋ね問



へば、腰元僅かに頭を上げ、「妾は好容夫人の婢女なるが、其夜夫人は難陀を誘ひ、月景殿へ行き給ひ、附人は皆従ひて、妾のみ残されしを、捕へられて参り侍り。抑も此所は何方にや、何うぞ哀れと思召し、破利舍那殿へ歸して」と、涙差含み烏驚くと、するに軍士は打點頭き、「イザ破利舍那殿へ連れ行かん」と、達婆に目醒せ、立上り、彼の腰元を伴ひ出で、我が家を指して行かんとせしが、イヤ待て、今頃は迦毘羅城の討手ども、我を目蒐けて居るは必定、然らば是より仙多良國の、燄光太子の許へ立踰え、一先づ姿を隠さんと、身繕ひして急ぎける。斯くて軍士は仙多良國の、燄光太子が許へ立踰え、この國に僅かなる、棲家を求め棲ひけるが、素より活計は靱師なれば、鐵砲を擔げ歩き、野山を廻りて獸を狩り捕り、此の皮を剥ぎ靱を作り、猶是を業とすれども、抄しき獲物も無くて、貧しき中に痛はしきは、伴はれたる腰元なり。破利舍那殿へ今日返す、明日返すと欺し賺して、留め置きて靡かせんとすれど、更に軍

士が心に從はず、軍士も殆んど持て餘したれど、こは全く年若の、羞かしき故なるべし、何れか手に入れてやと、思へば然のみ逆らはず、籠の鳥として養ひ置きぬ。斯くて軍士は又或時、山へ獵に出でけるに、唯有る深き谷底に、其丈三尺餘りの牝熊、水を呑みて居たりしを、軍士は見るより早業に、二つ玉を込め、筒先を彼の牝熊の方へ押向け、狙を定めて火蓋を切り、引鐵引かんと爲る程に、其の牝熊己れが腹へ、指をさしつゝ、兩手を合せ、軍士を見上げて拜む有様、こは子孕みたる熊なりと、軍士は彌喜びて、彼奴討取らば皮に痕つき、且つ腹孕の子を殺しては詮なし、手捕りにせばやと思ひしかば、鐵砲の火蓋を元の如く爲し、擔げて岩根を踏み越えつゝ、谷底指して下れども、件の熊は逃げもやらず、窟窟まり居ける故、軍士は優しく聲を懸け、傍へ寄りつゝ腰に付けたる辨當、握飯を取出だして與へけるに、畜生ながら事を辨へ、拜みて禮をなす有様、いと不便なる物なれども、軍士は素より大惡無道の、武士の成の

果にて、物の哀れを露知られば、熊の喜び握飯を、食ふ暇を窺ひて、用意の腰細手繰りつゝ、不意に投げ掛け手早くも熊の四足を縛めければ、熊は驚き悶搔けども、はや縛められて働き得ず、いと哀れなる聲音して、泣き叫びつゝ、軍士の顔を、眺めては涙を落し詫ぶる有様、不便なれども如何なく聽入れず、軍士は頓て鐵砲を、四足の間へ刺し通し、心猛くも引擔げ、我家を指して立ち歸り、箱を鎖させて是に入れ置き、食物とても碌々に、與へざれば日に増して、熊は瘦せ衰へけれども、軍士は更に心も着かず、或日又能き獲物をせんと、鐵砲を擔げ路を指して、出でんと爲ける門口へ、一人の武士入り來り、「鞆作り

の軍士と云ふは、此方なや」と尋ねられ、軍士は腰を折り屈め、「さん候、鞆作りの、軍士は則ち某なり。御用の筋は如何にや」と尋ね返せば彼の武士、供人に擔がせし鞆を是へ差出だし、「扱て此の鞆の如くなるを、此度初めに作へ度く、所々方々へ尋ねしかど、是ぞと思ふ好き皮なし、若し爰許へ來りなば、

有りもやせんと言ふものあれば、遠路を尋ね來りたり。何と此の鞆の如き好き皮有るや」と尋ねられ、軍士は其の鞆を手に取り、此所彼所を檢め見しに、世にも稀なる大狼の、一枚皮にて包みたる、鞆なれば軍士は感じ、彼の武士に打向ひ、「某是迄年久しく、鞆作りを業と致せど、未だ此の鞆程の、珍らしき皮を見ず、假令如何程大切なる品なりとも、大きなは皆寄せ皮にて、目立たぬやうに掛縫致し、作りたる物なれど、此の狼の皮は、正眞の一枚皮にて、中々に某方に、仕込みし狼に、此に及ぶべき皮とては、絶えて之無く候へば、是は餘人に仰せ付けられ、下されよ」と辭退をすれば、武士再び尋ねるやう「然らば又何なりとも、此の鞆に張付く可き、好き皮は無きや」と聞きて「さん候、鞆に張るべき獸の皮は、大抵定まり有るものにて、眞逆に牛馬の皮を以て、作る事も成り難く、猶か熊かの皮を以て、上品と致せども、生憎に好き熊の皮さへ、手許に切らし候へば、急の御間に合ひ申さず、此の御鞆に張るべき熊は、

これ、是を御覽ぜよ、小さくとも此程の、熊にあらざれば御川に立たず」と、箱の内なる熊を見すれば、武士熟々打眺め、「何と此の熊の皮を以て、作りくればまじきや」と裏問へば、「如何にも此に候へば、御用には相立てども、此の熊には腹孕之有り、頓て産み落す時を待ち、腹孕の皮を以て、作れば大に益有る品あり、其故にこそ斯の如く、餌を與へて飼ひ置き候。頓て産み落せし後は、何れとも仕るべく」と言へば件の武士は、「ア、いや、暇取つて宜き筋ならば、如何にして之迄來りはせず、然らば腹孕の、皮の代まで與へなば、急に作らんや。抑も我を誰とか思ふ、阿菩耶尼國の賢立太子なるぞ」と、聞いて軍士は打愕き、「扱は大國の太子とも、知らぬ事とは申しながら、無禮の段々免させ給へ」と、遂かに下りて跪き、平伏して、又言ふやう「こは勿體なや忝けなや、此の破家へ太子の來臨、身の譽れ此の上なし。仰の如く腹孕の、皮の代まで給はりなば、如何てか否み申すべき。急ぎて御用の御鞆を、張り立

て仕らん」と、請合ひければ、太子は悦び、「然らば早速に約を違へず、張り調へて遣はすべし。尤も摩尼破利國の靜觀太子の所持の鞆、見事に出て來し由、其の作り主は誰そと問ひしに、私良摩國の片邊りに棲む、夜叉軍士と云ふ者なりと聞くより直様私良摩國に赴きて尋ねしに、此者行方なくなりしとあり、餘儀なく彼所の鞆師へ、誂へんと爲てけれども、是に張るべき宜敷皮の、無ければ俺みて在りけるに、家來の者が此國に、軍士と云ふ者來りて、鞆作りを業と爲る由、聞き出だして告げしかば、取敢ず尋ね來て、對面して珍重く。扱て鞆の格好は、靜觀太子の持ち給ふ、品を手本に頼むなり」と、言ひつゝ頓て懷中より、金の小包取出だし「聊かながら先づ是を、印の爲に渡し置く。殘りの代は國元にて、鞆と引替へに渡すべし」と、約を固めて賢立太子は、別れて阿菩耶尼國に歸らせらる。扱て軍士は思ひ寄らざる、儲口の出て來しも、此の熊を生捕りし故、然すれば今一度彼の谷へ行き、此の熊の牲熊を討取り、

其皮にて此の鞆を張り、是なる牝熊の腹孕は助け置きて又も好き、鞆を張りて儲けんと、慾に迷ひし胸計畫、身支度して彼の谷へと、鐵砲擲げて出てながら、腰元に向ひて言ふやう、「これ／＼其方今日も亦、能く留守しながら此の熊奴に、油断なく心を着けよ、最早打殺すに近ければ、食物を與へずに置きて、随分段ないぞ」と、言ひ捨てて行く後を見送り、腰元は熊の傍へ寄り、「今のアノ言葉、畜生ながら聞いてゐる、然ぞ悲しかるが妾とても、矢張り其方と同じ事で、疾うから此の家に捕はれて、逃ぐるに道さへ辨へれば、日に泣いて暮らすのみ。其方にも昨日今日迄は、妾密かに食物を、秘し置きて與へしが、明日は何うやら命を失ひ、鞆に張らるゝやうな様子、然ぞ悲しかる」と食へ差しの、飯を聊か持ち出で、「なんぼ明日限りぢやとて、食物與へずに置かれうか。傳へ聞くに主親を、殺せし程の罪人でも、刑罰に行ふ迄は、三度の飯は與ふる由、餘りと言へば主人の非道、妾も頓て殺されう、是は些細な

殘んの飯、腹持ちも有るまじきが、志ぢや、受けて給も」と、箱の格子の間より、落してやれば、件の熊、兩手を合せて伏拜み、腰元の顔熱々と、眺めて涙はら／＼、滴して已れが腹へ指さし、伏轉びつゝ鳴き悲しむ。心はそれと問はれども、我が腹に子の無きならば、此身は死ぬるとも厭はれど、子を産むまでの其の間、何うぞ命が助かり度いと、口は利かれど其の舉動、物言ふよりも能く分りて、乙女は耐へ兼ね、持ちたる小皿を投げ捨て、わつとばかりに貫ひ泣して前後を忘れ伏沈みて居たりしが、心を察して餘りの不便さ、よし、然らば、此の熊を、助けて一層逃がしやらん。妾とてもいつ都へ、歸られべきとも思はれず、とても果つべき命ならば、切めて物の役にも立てん。然うぢや／＼と覺悟を極め、箱の鍵を尋ね出だし、錠捻開けて蓋を退くるに、熊は悦び、速かに、逃げ去るかと思ひの外、箱より出で、乙女の傍へ、寄りつゝ其の袖を啣へ、地に平伏して辭義をなし、少しも動く氣色無ければ、早や逃げ行け

と物を叩き、音に脅せど如何なく、立ち去る様子見えざれば、乙女は殆ど持  
て餘して、「扱ては久しく箱に入れられ、腰立たぬのか不便やのう、斯くなる上  
は是非もなや、殺さるゝより外無しと、いと悲む折からに熊は異議なく腰も  
立ち、門目指して走り出づれば、こは逃げ行くか、嬉しやと、思ふ程なく熊は  
又、雀躍して門口より、走せ歸りつゝ如何に爲けん、縁の下へぞ逃げ入りける。  
折から戻る夜叉軍士、今日の獲物は案に相違し、兎一匹討ち取らず、剩へ岩根  
にて、足に負傷して氣色悪く、眩きく入り來りしが、熊の箱は口開け、中は  
空にて何にも居ず。打楞きつゝ内へ入り、彼の腰元に様子を問へば、乙女は兼  
て覺悟の上、少しも臆する氣色なく、「サア其の熊を逃がせしものは、侍人では  
なく、妾なり。抑も畜生とて子を思ひ、親を慕ふ心根は、やはか人間と違はん  
や。況して獸の内にて、猪狼と事異り、熊は能く人語を開き分け、理非を  
辨へ、禮をも知り、人間に近き物からに、腹に子の在るをいとひて 最前妾

に打向ひ、若し明日にも殺されなば、腹の此の子を如何にせんと、露はに物は  
言はれども、心はそれと知らるゝまで、泣き悲むが恰らしき、餘りに見るに耐  
へ兼ねて、只今逃がしやりたれば、熊の代りに妾が命、取て堪忍してたべ」と、  
進み寄られて軍士は呆れ、「いやはや不埒千萬なる、女郎奴が愚痴三昧、是迄養  
ひし大恩を、仇で報ずる曲者が、口賢い仁義立は、此の天竺にない習慣、是は  
定めて迦毘羅城の、悉達太子が邊りに居る故、聞き囁りたる似非方言、あの悉  
達のみ生れ損れて、前代未聞の臆病者、天竺の國風に違ひ、物の報いの因縁  
のと、ものゝ哀れを言ふに感染れて、取得も無き畜生をいとひ、子が恰らしい  
の不便のと恐れ戦く心から、大國なる阿耨耶尼國の、賢立太子の御鞞に、作る  
べき大切の熊を、放ちやりたる阿呆者、獸を殺すは我が渡世、其の家業を妨ぐ  
る奴、假令神にも佛にもせよ、助けべき所以なしと、口惜しさの一途の面色、  
目は血走りて齒齧みを爲し、「己れを殺して太子へ言譯、觀念せよ」と腰刀を、

抜き翳しつゝ、鬪り斬に斬り苛んと立ち懸る、折もこそあれ閉て切りたる、縁側の障子瓦落くと、脱れ倒るゝ其の物音、宛ら雷鳴震動の如く、驚しく鳴り渡れば、軍士はあなやと見返る後の、倒れし障子をみりくと、粉微塵に踏み碎き、以前の牝熊大口開き、毛を逆て、驅け来るに、是はと愕き逃げんとしたる後より、早や飛び着きつゝ、襟髪岸破と引脚へ、二振り三振り振りしかば、さしもの軍士も七頭八倒、右手に刃を持ちながら、働きも得ず悶搔き苦み、遂に首筋を食ひ切られ、敢なく死せし非道の報、心地好くこそ見えにけれ。熊は軍士が首を脚へ、然も嬉しげに吼ゆる聲、仇を殺して悦ぶとは、思ひながらも乙女の心、身の毛も彌立ち頭へつゝ、逃げ出さんとしてけるを、熊は手眞似で心を知らせ、先に立ち出てける故、扱は最前箱より出だせし、其の恩を報ぜん爲、妾が危ふきを救ひしならん、さすれば附添ひ行くとも、开も何事の有るべきやと、亂次風装其の儘に、熊に随ひ行く程に、熊は小道の草を分け、

行きくゝて高き低き、山を三つ四つ踰えけるに、頓てぞ廣き往還へ出てぬ。こは見覚えの有る道と思ひつゝ、猶行くまゝに、いつしかに、早や迦毘羅城なる御門前へ來にければ、御門の番卒等愕きて、こは恐ろしき熊來れりとして、棒持ち出だして追はんとするを、那方此方へ吼え退けて、既に二の御門迄驅け入れば、乙女も共に馳せ入りたり。早くも此事宮中へ聞え、右梵士太郎は取敢ず、驚破とばかり走り出で、唯見れば一つの荒熊が、首を脚へてありしかば、是は如何にと躊躇ひしに、後に跟きたる乙女あり。こは又誰そと見咎むれば、兼て彼の見覚え有る、行方知れざる腰元なれば益々愕き呼び近づけて、是に様子を尋ぬるに、乙女は遠路の疲勞を忍びて、ありし事ども云々と、詳らかに告げしかば、右梵士は聞敢ず、扱ても不思議の事どもかな、畜類と雖も恩を知り、是迄送り來るのみならず、手を別け扱す軍士が首を、脚へて宮中へ來りしは、帝の御威勢賦まで、靡き従ふ勇ましき。疾く此の由を奏聞して、熊にも褒美を取

らせんと、在合ふ士卒に守らせ置き、乙女を隨へ奥へ入る。其の隙に彼の熊は、軍士が首を玄關の式臺へそと置きて、支ゆる士卒を驅け散らし、後をも見ずして走り去りぬ。良有つて右梵士は、再び玄關へ立ち出でしに、彼の士卒等は畏るく、熊の逃げたる次第を告ぐるに、然らんには是非無しとて、右梵士、軍士が首を取上げ、優陀夷の前へ持出だし、「只今申上げし如く、提婆に齊しき軍士が首、迦毘羅城の街に掛け、世の悪人の戒めに梟し置かんは、如何にや」と言葉雄々しく述べけるを、聞きて優陀夷は打案じ、良有つて右梵士に向ひ、「如何にも貴殿の言はるゝ處、一理無きにあられども、提婆逆多と事異り、件の軍士は惡計を、企てながらも一つとして、其の謀成就せず、帝へ對し奉り、然して是ぞと言ひ立つる、妨げも無きに其の首を、往に掛けて梟すも如何」と言ふ言葉未だ終らず、右梵士は猶膝を進め、「こは優陀夷殿の仰せとも覺えず、假令妨げは之れ無くとも、既に腹中に惡事を企て、帝を害せんが爲なれ

ばこそ、難陀太子の御祝を見込み、毒菓子に献上して、太子迄害ふ計畫、是等の惡事輕からず、斯かる者を罪せずば、國の掟立ち難からん」と、口賢しく述べるを聞き、優陀夷も道理と思へども、街に掛けて梟す程の、罪は無き故如何にせんと、光明大臣を招ぎつゝ、是等の事を談合するに、素より優陀夷の下につく、光明なれば兎角を言はず、如何にも宜敷やうに、計らはれよとのみ答へて、此方へ拘泥む事なれば、よし此上は是非もなし、帝へ奏し奉り、微感に任せ申さんと、右梵士を政所へ待たせ置き、優陀夷は光明と諸共に、帝の御前へ進み出で、「今日計らずも一匹の大熊、夜叉軍士の首を啣へ、先達て行方知れずなりたる、破利舍那殿の腰元を、送り來り候により、彼の腰元に仔細を問ひしに、云々に候」とて、軍士が有様始めより、終り迄洩らす事なく、逐一に奏聞しければ、帝聞し召して宣ふやう、「扱も稀代の事なりき。然しながら彼の軍士は、好容夫人の兄にして、普通人とは違ふにより、重き罪を押宥めて、免せ

と申す譯なられど、彼が爲す事は一つとして、是ぞと取るべき妨げ無く、只心憎きは先つ頃、好容の兄なりとて、何事の計謀か有りけん、毒菓子を持參せし科なり。然れども其時女房の、吉祥が忠臣に依つて、夫の罪を白狀し、自身と彼の菓子を食ひ、死して穿議を立てたれば、よしや軍士は憎むとも、女房の志、亦好容夫人の嘆きと云ひ、彼是以て此度の罪は、死罪に及ぶ迄にはあらず。若し存命へてあるならば、猶此上の妨げも計り難ければ召捕りて、永く獄屋へ入れ置くべしと、兼て光明にも言付け置く。然る處天命免れず、軍士計らず齋類の爲に、一命を落せしは、齋が健倅とも云ふべし。若し死せずして此上にも、如何なる事をか企て、悪事を爲して召捕るとも、彼は難陀太子の伯父に當れば、現在首を討つ處刑に、行ふ事もなし難く、然りとて忽がせにもなし難く、實に難儀の筋なるに、今他國にて死したるは、此上も無き國の吉事、斯かる上は彼の首級は、是早一世の別なれば、好容にも一目見せ、古郷へ送り遣はし、

親どもへ葬らせよ。素より露はにせざる事故、然のみに國の民共が、政事の善悪を、論ずる事有るまじきぞ。此儀を何と存ずるや」と、叡慮も安く宣へば、優陀夷、光明、猶平伏し、「寛仁大度の御計らひ、如何にも術好く候はん。いてや仰せに従ひて、法の如くに仕らん」と二人俱に御前を退き、政所へ赴きつゝ、件の山を右梵士に、云々と示せしかば、右梵士始め其餘の諸官も、再び軍士が事に就き、兎角の沙汰もせざりける。然れば帝の仰せに任せ、軍士が首を好容夫人に、見せ申さんにも汚れし物を、宮中の奥へ入るべきなられば、優陀夷は右梵士に持たせ遣はし、好容夫人を破利舍那殿の、御口へ呼び出だし、云々の山を述べて、軍士の首を見せ參らすれば、夫人は兼て斯く有らんと、思ひながらも、しかすがに、現在の兄が首、殊に果敢なき最期を聞き、涙と共に縋り着き、泣き悲みて果てし無ければ、右梵士太郎言葉を正し、「如何に夫人聞し召せ、其の御嘆きは然る事ながら、心善からぬ御見上、如何なる罪にも遇は



るべきを、今日の最期を遂げられしは、計らざりける身の幸ひ、殊に帝の思召にて、御身の爲に此の首を、親御の許へ遣はして、葬らせよと有難き仰せ。嘆きを止めて悦ばれよ早や時移りし、いざさらば」と、首桶携へ立たんとする。其の手に縫り好容夫人、「イヤ何と有る、此の首級を故郷の親へ遣はさるゝと。開は御情なる事ながら、年老りたる母人の、此の首を一目見るならば、假令善からぬ兄なりとも、子に迷ふは親の憤ひ、若しもや嘆き悲みて、泣死せんも計られず。何とぞ是は私へ、御任せ下されかし。親共へは此方より、宜きやうに申遣はし、帝の御仁恵を告げべき故、此の事偏へに頼み入る。帝の御前は優陀夷殿を、頼み願ひ申せば、御使の落度にも成り侍らじ」と、親の心を思ひやり、只管右梵士に頼みければ、右梵士も其の心を感じ、然る事も亦有るべし、心得候とて立ち歸り、優陀夷へ其の由申しければ、優陀夷も亦是を感じ、則ち帝へ奏聞せしに、然らば夫人の心に任せ、如何にとも計らはすべしとの、

仰せに依りて再び又、願ひの如く勝手たるべしと、夫人の許へ遣はしければ、好容の喜び限りなく、速かに其の首を、鬱頭覽弗の院へ送り、慇懃に葬らせ、忌日くのとひ弔ひ、怠りなく勤めものして、回向細やかなりけるは、如何にも殊勝に思はれて、いと悼はしき有様なり。斯くて又好容夫人は、古郷なる母の許へ、兄の事細々と、文に認め遣はすに、夜叉軍士がそこはかと無き、悪心の既に増長して、天命遂に免れ難く、因果觀面の報いや、畜類に身を食ひ割かれ、果敢なき最期を遂げられし故、其の首級を妾請ひ受け、鬱頭覽の院へ送りて、慇懃に弔ひ侍り、是は抑も定まり事と諦らめ給ひて、御嘆き必ずく御無用なり。御勘當まで遊ばせし兄上なれど、妾始め血を分けし者に侍れば、如何ばかりか悼はしく、袖の時雨の晴れ間無きに、況して親子に在ませば、善きも悪しきも我子には、隔て無き物にしあれば、極めて御嘆き強からんと、其の御首級さへ送り申さず、幾重にもく、御悲みの程諦め給ひて、御煩ひ之無

きやう、御身おんみを大事に遊ばされ、御回向ごまこうの程ひたすら只符に、願上げ暮らせ候など、細々と書したき認め、意見いけんを加へて親の嘆きを、甚いたくも止め遣はしぬる、志の程こそしをらしけれ。めでたしく。

明年は嵯峨の釋迦開帳につき、十二編、十三編六月中に出版仕候。

### 釋迦八相倭文庫

#### 十編之序

一書に曰く、太子ひとこな成人りて、出家はつぐわんしきりの發願切なれば、父帝みかど婆羅門優陀夷を召して、太子の友となし、事に觸これをいされ、諫をいさ之れど止むことなく、十七歳にして耶輸陀羅女やすだらによを娶れど、契けい室しつの念更になく、十九歳にして不老、無病、不死、不別、此の四よつの願ひ叶はゞ、出家の望みを切つべしと云ふ。帝みかど愁うれひて是は得ること不能あたはず、今朕われし嗣子しなし、有一子いっしば許さん

とあり。太子則ち、耶輸陀羅女の腹を指させば、忽ち羅暎羅、天より變没して化託あり、其夜健陟の馬に乗り、車匿を連いて檀特山へ赴く。時に周の昭王四十四年二月八日と有り。此説に異なるは皆戲作のすさびと讀み給ふべし。

弘化五戊申年孟陬發覽

万亭應賀識

佛法濫觴

中華にては後漢明帝七年、摩騰、竺法蘭佛經を將來る、日本にては繼體帝十六年に、梁司馬達等來つて奉佛。然れ共信ぜず。人王三十代、欽明帝十三年壬申の歲冬十月百濟國聖明王より、佛像及び千卷の經論を貢す。物部尾輿、中臣鎌大臣が計ひにて、佛體並びに種々の佛具を蘇波の堀江へ棄てさす。其後川明天皇の皇子聖德太子深く佛法を信じてこれを廣大に弘め給ふ。

凡 例

此冊子は、元より今様の人情に連れられたれば、倭文庫と題して已に初の巻に、婆羅門の優陀夷を臣職に見立て、又悉達九歳にて、願以此功德の文を唱ふ。之等を始め、既かき事ども、猶末までには擧げて敷へ難し。扱太子前世には、八千度生れ出て給ひ、中にも尸毘大王と生れし時には、鳩の爲に肉身を斬り、又薩陲王子と生れし時は、飢ゑたる虎に身を施す。此類ひの物語りも、末の巻に書き加ゆれば、前後の差別不合一のことも、其の巻毎に云ひ解かず。都て初編より終編までの拙き事を能せん爲、茲にあやまり置く事しかり。

万 亭 應 賀 述

釋迦八相倭文庫十編

去る程に悉達太子は兔に角に、御身の罪障、深きを省み給ひて、とても發心報謝の道に入り、母毘耶夫人の御菩提を弔ひ、尊れく衆生濟度の願を、満てん事難ければ、後世怖ろしくも思ひ返して、一旦浮世の塵に交はり、十善の位に即きて、天下萬民の政事を、知召さんと思召し、數多の美人に傳かれ、歌舞の音樂麗はしく、梅檀乳水の薰り潔よく、山海の珍味を集め、御身に絳羅錦繡を纏ひ、七寶を鑲めたる、九重の金殿玉樓に、夜の御伽には、鹿野女、毘陀彌女、耶輸陀羅女等が傳きて、最と妍きたる其の有様、殊に耶輸陀羅女は懷妊して、帝を始め太子の悦び、勞ふるに物無かりしが、或夜の御夢に、佛の御告げを聞召し、是まで様々の情なき事も、却つて幸ひの基、母毘耶夫人は初利天へ、生れしと聞き給ふより、遽かに是まで茫然と、送りし月日の榮華を悔み、妻子珍

寶なにかせんと、忽ち發心報謝の道に、再び心を寄せ給ふより、三人のお伽の姫たちの、花の色香も今更に、枯木の如くに思召して、絶えて御契りも無かりし故、御胤宿し参らせし、耶輪陀羅女は何となく、衷悲しく啣ち給へど、太子は此の姫へすら、心に忍び在す事は、露ほども語り給はず、況して其餘の者どもをや、然れども思ひ内にあれば、其の色面に現はるゝといふ、世の比喩に漏るゝ事なく、優陀夷夫婦、高明大臣、命婦等が見る口には、又候發心の御志、不意くも起りしか、情なき若君かな、漸くにして是までも、止め参らせしを又しても、然る事ありては皆々が、心遣ひも水の泡と、嘆く命婦を押し止むる、優陀夷の女房は流石にも、年長けたる思案も深く、「幸ひ今にも太子の御胤、安々と御誕生あらば、何程でも若君の、御産聲を聞き給ひ、豈夫々發心の、御志は止まるべし。是につけても何うぞ早く、御誕生あれかし」と、語る折から其人優陀夷は、太子の御前へ出でんとて、來懸るを呼止め、「此程太子の御有様、

心を着けて伺ひ見るに、如何にも不審に侍るかし、こは此儘に捨置きては」と、語れば優陀夷も、言葉を密め、「然れば其事、發心の思召を漸くに、此程押へ参らせしと、思ひて安堵の胸もまだ落着くや落着かぬに、又候其の御兆、然りながら耶輪陀羅女は、既に御胤を宿せし故、若し是にても安々と、御誕生あらば絆となりて、其の思召も止みなんか」と、雖が心も同じ事にて、只若宮の御誕生を力草にて待暮らす。月日に關守据ゑざれば、最早や七十八の、御歳の榮華の程も、散り行く花雪に異らず、只一睡の夢と覺めては、跡方もなく最と果敢なし。然れば太子の御年も、既に十九歳と成らせ給ひし、其の春の初つ方、尙御出家の御望み、頻りなるに従ひて、耶輪陀羅女も心ならざる、御舉動のみ伺へば、一々優陀夷の女房まで、云々と告げ知らせ、懐胎の若君の、行末の事を案じ暮らして、泣き崩折るゝを女房は、諫め賺して寝ませ、又是等の事どもを、淨飯王橋登彌の方へも告げ奉れば、甚く御機嫌損ひ給ひて、「今難陀

太子あれば、若しもの事のあるとしても、朕が嗣統はあの難陀に、定めても然るべきが、何を云ふにもまだ孱弱、殊に悉達が總領の、繼嗣に生れし身を以て、斯く淺ましき心となるも、磨が過世の因縁と、諦めても諦められぬ、心の絆は此事のみ、必ずしも油断なく、宮中を守り傳き、切めて耶輸陀羅女安産するまで、心を着けよ」と仰せあれば、優陀夷畏み退き出で、帝の御言葉を重んじて、其日よりして悉達太子へ、傳きの女中五百人を、それごとくへ振分けて、晝の守り、夜の守りを定められしが、晝の内は人数も少なくし、夜に入りては晝に倍て、一間く守らせける故、女中どもは寄り集り、まだ肌寒き春の夜風を、屏風にて防ぎつゝ、其中に大火鉢を据ゑ、是を取巻、睡らじとて、思ひく物の語の、中にも聲高に聞ゆるは、歌舞伎の噂、或ひは又、髪容の善悪を、褒め誹りなどして居る處へ、お次女中幼なく、火鉢の側へ割込みて、「何と皆さん、今夜は寒いぢやありませんか」と、首ひつゝ己が手を焙りて、顔を撫てれば、

茶の間の女中、「オヤ何だれえ、ソレお前の形態を御覽な、おてこのお曼陀羅見るやうだれえ」と打笑へば側よりお仲居、「時に此間、好容夫人のお局を、鼓女と言ひなまつたが、あの譯を一寸話して、お聞かせな」と言はれてお茶の間、「アイあれば斯云ふ譯よ。あのお局は吝しくて、頭の物や着類などの、美しくいの見せびらかし、着飾つた後、姿は、誠に美しい故、後から見ればヤアと褒め、前から見ると痘瘡の痕で、顔が一層醜い故、吃驚してハアと言ひます、鼓にはヤア、ハアと云ふ、懸聲がある故に、それで鼓女と云ふのさ」、「威程それで分つたわいの。時に私が謎をかけるから、皆して解いて御覽よ。サア蓬萊の島臺とかけて何と解きます」と、言はれて皆々腕を組み、考ゆれども解けぬ故、お仲居は打笑ひ、「ほんに皆意氣地が無いれえ、蓬萊の島臺とかけて、破れた蚊帳と説きます。心はソレ、釣る(鶴)と、蚊め(龜)が、入る(居る)ではないか」、「威程く、破れた蚊帳だから、鶴と龜が居るとは、是は面白い。そ

んなら私が、（おかし）話を致さう。抑も南閩洲の内、此の天竺より東に當り日本と云ふ國あり、此國の關は、澄めるもの天となり、濁れるもの地となり、扱蘆の芽の如きもの、化して國常立命となり、それより天神七代目に、伊奘諾伊奘冊尊といふ、男女の神現はれ、天の浮橋に立給ひて、鶴鶴といふ鳥の尾をひよこくと動かすを御覽じて、伊奘諾の神天の逆鋒にて青海原を探り給ひし其の滴りが、凝りて淤能基呂島となり、是を國の柱となし、男神は左よりまはり、女神は右よりまはりて交はりければ、女神は先にあな嬉しや、可美男に遇ひしと宣へば、男神腹を立ち給ひて、又めぐり直して交はれば、今度は夫婦の交はり、子を産む初めは、此時より」と物語れば、座中残らず噴き出だし、笑ふ中にもお次女中、「オヤ、いかなことでも日本の女子は、あな嬉しと言つて島や國を幾つも産むお腹なら、双子三つ子は愚かな事、十人や二十人の子を一度

にひよこくと産むである。而して又日本を、おほやまとの國と申すは、ありや何云ふ譯であらう」と然れば日本は人の心大きく和らぐ國なれば、因でおほやまとといふげな、後は笑ひに噴出だす。春の夜明の風寒く、夜のお伽は代はり合ひ、細屋ぐ指して下り行く。扱て宮中の御門ぐの、扉には兼てより、四千里響く鳴り鐘を付け、番人を置きて堅く守らせ、夜は簀を焚かせつゝ、大方ならず用心しつ。扱て或日、淨飯王、新宮へ赴かせ給ひ、太子に逢うて宜ふやう、「如何に悉皆聞き給へ。おことは又も此程より、頼りに發心正覺の志有之る由聞きしが、道は開も如何なる事ぞ。過ぎし年は等の事を、深くも制し止めしに、漸くにして廢が諫めの、言葉を用ひ従ひて、親族は六ふに及ばず、凡そ殿上に列る者の、其悦びは火中より、玉を拾ひし心地にて、既に新宮も造進して、傳きの女五百人を付け、殊に此節耶輸陀羅女は、懐胎の由聞き侍りて、何に醫へん廢が悦び、然るを尙振捨て、發心の道に入らんとは、如何なる心に候ぞ。

夫れ人と生れては、親ほど尊き者なければ、罪亦不孝より大なるはなし。若し尙此の言葉に背きて、親の後嗣、十善の位を免れて、我が一存を立つるは甚だ宜しからず。殊に又耶輸陀羅女、今にも安産せば、太子の若く磨始め、幡雲爛も見て悦ぶに引易へて、後の嘆きは如何ばかり。野を翺り山に臥す、禽獸すら身に代へて、子を思はぬは無きものを、春の雉子は火の中に、入りて子故に命を果たす。是皆其の子の事の可愛さに、其を助けたき故ぞかし。人を啖ひ野を荒す、猪、狼たりとても、子を慈む心は同じ。然るにおことが志は鳥畜類にさへ劣り、親妻子を捨て、只一人、山へ入るとは聞えぬ心。宮中の間毎は更なり、出口くんに晝夜とも、多く番人を付け置きたれば、假令忍び出づるとて、如何にしてか出でらるべき。早く心を離へし、磨が十善の位を嗣ぎ、萬民の心を安んじ、國の政事を聞召せ。やよ、のう、太子」と言葉優しく、道理貫めて宣ふを、太子は只默然として、俯々聞きて居給ひしが、聽て頭を擦げ給ひ、「ア

ラ雖有き父上の、御心厚きお諭言、此身に取りて如何ばかりか、恐多く勿體なし。然り乍ら磨已み難き、出家の望み侍るなり。是を深く止めんとならば、外に四つの願ひあり。是さへ聞召入れられ、達し給はらば出家の事は、思ひ止まり侍るべし」と、宣はすれば帝は悦び、「オ、出家だに止まらば、其外々の願ひ望みは、如何なる事をも叶へ達せん。开も四つの願ひと云ふは、如何なる事ぞ」と問ひ給へば、「然れば磨が四つの願ひは、第一に不老、第二に無病、三つには不死、四つには不別、此の四品の願ひさへ、身に叶ひ侍るならば、何しに發心の道に入るべき。是叶はればこそ然ばかりに、出家を遂げたき志、何とぞ此の四つの願ひ、父上の御慈悲に、叶へてたべ」と宣へば、帝興覺めたる面色にて、「こは太子とした事が、开も四つの願ひと申すは、如何なる事と思ひしに、思ひ寄らざる事どもなり。其願望は一つとして、凡そ此世に生れし者の、身を離るべきものにあらず。尊きも賤しきも遁れ難きは是なるを、何の過忘に然る事を、



言はるゝやらん、心得難し。开も云ふ事に事を變へ、斯る願ひは神事にも頼み難かる無法の言葉、再び聞くも忌はし」と、叱り給へば、太子は尙頭を垂れて宜ふやう、「然れば浮世は此の四つの、苦み更に遁れ難く、刹子といへど僅かにして別れ、美貌といへど老に入りて、昔の色香跡形もなく、わりなき契を結びぬる、妻や妃の其の交情も、無常の風に誘はるれば暫しは離れず睦まじき、鴛鴦の後の番ひさへ、離れぬくなる慣ひ、斯る苦界に心を止め、十善天子と敬はれ、九重の内に安居して、綾錦を身に纏ひ、珍膳珍味を按排べ、五樂の戯れ晝夜を分たず、假令天上の樂みを盡すとも、僅か五十年百年の、命は實に假初なる、一睡の夢の榮華にこそ。然れば浮世の衆生等が、斯る大難を抱へて居ながら、榮耀利慾に迷ひつゝ、世の塵に交はる事を、辨れく教へ諭して以て、永劫末代滅期なき、無量壽の極樂國へ、引導の願を満てん爲、發心報謝の道に入るべき、塵が願ひを何とぞ偏へに、御聽濟遊ばされ、十善の位をば弟の羅陀

太子へ、御譲り給はれかし」と、心強く宜ふものから、流石父上淨飯王は、既にお年の上なれば、涙脆く在まして、最愛の御子一旦に、發心の山路へ入り給ふを、惜みて頻りに嘆き給へば、御側に居合はす者共も、帝の心を察し入り、皆々涙に咽びける。帝は尙是を許さず、又々太子へ向ひ給ひ、「然らば父が言葉なば、如何體に背きても、和耶一人の願ひさへ、叶へば可しと思はるゝや。此の返事を承らん。聞かまほし」と宣へば、流石の太子も赤面して、暫し言葉も無かりしが、頁有つて仰するやう、「中々以て父母の御言葉に背きても、身の願ひ叶ひさへすれば、宜きと云ふ事は更々無く、と申して膺が一途に、此度の發心は、父上の仰せに背き、不孝には聞ゆるもの、當來作佛の時を得て、正覺を迷ぐるものならば、一度父の命に背き、不敬の罪に百倍して、大孝心の道に當れり。今、世の中か思惟るに、嚙喰ふ蟲は藂の辛きを知らず、厠の蟲は臭きを知らず。人の目からは是を見て、淺ましき者と侮れど、人間娑婆に迷ひて暮

らすを、佛の目から見る時は、彼の蟲けらより尚、淺ましき者と笑ふのみ。然れば今日榮華に誇るのも、明日は悲しみ回り來り、衣食住も安からず、有爲轉變の世の有様、天に風雨の妨げあり、地に水火の禍ありて、身の歡樂は風前の、燈火に異なられば、磨足を見るに忍びず、衆生の迷ひを濟度の爲、父母上の仰せに背き、妻子を見捨て出づるとも、正覺さへ送げ終れば、又宮中へ立歸り、御日通りを致すべければ、今更にお嘆きなく、思ひ捨てさせ給へかし」と、押返して宜へば、帝は心の内に思すやう、不思議の事を言ふ者かな、如何にも太子は凡人ならじ、過ぎつる年多く招きし、相見の内年長けたる、阿私陀老翁が見立ての如く、十善の位をば、是非く嗣がぬ者なるか。實の母驪耶夫人は、太子誕生して七日目に、世を去りしを深く包み、彼が伯母なる橋邊彌を、生みの母と教ふれど、不思議にも幼なき時よ、是等の是非を能く辨へ、又人の胸の内を、察し知る事更に違はず、發心の望むも故ありけり。さればとて其儘

に許すべきにあらずとて、尙も頭を打掉り給ひ、「イヤ〜朕が心は違へり、如何なる事の在すとも、其等の望み到底も叶はず、思ひ断え給へ」と仰せつゝ、聽て御褥を立ち給ひ、情なく歸らせられたりける。後に太子は熟々と、思案の胸を凝らすにも、先立つ者は涙にて、只々御身の遣る瀬なきを、頻りに悔ませ給ひしが、何れなりとも王宮を、速かに立出でたき、思召止まされども、宮中は晝夜とも、女の守りを隙なく附けられ、是をば縦や兎角して、容易く忍び出でたりとも、門々には雜色衛士の、守り最と嚴重にして、門の扉には、四十里響く鳴り鐘を付け置かれ、夜は篝火を焚き明かし、いと尙厳しき故、譬へば蟲と化したりとて、遁れ出づる事難し。如何にせましと只管に思案に疲れてとろ〜と熟睡むと仕給へば、諸神諸菩薩あり〜と、御枕邊に集ひ給ひ、妙なる音楽名香の、香り馥郁たる其の中に、淨居天彷彿と、現はれて宜ふやうに護哉〜、御身太子の、出家を送ぐるは今此の時、必ず〜怠りて、斯る諸佛の

結縁な、空しく失ふ事勿れ、發心報謝の志止む事勿れ、如何にや如何に」と佛達、御寢屋の内に充滿して、聲々に宜ふに打擗き、太子は御目を覺し給ひ、四邊を見れば御側には、耶輸陀羅女添臥して、其外には誰も居ず。況して諸佛の御姿は、跡形も無くならせ給ひて、太子は御心穩かならず、熟睡み給へば以前の如く、又々佛現はれ給ひて、少しの間さへ眠られず。愈々出家すべきの時は今なるかやと思召し、然らば此上は外になし、先づ耶輸陀羅女を賤して見んと、やをら居直り宜ふやう、「如何に姫確かに聞き給へ。そもや御身と此磨は如何なる過去の因縁にや、取分き深く語らひて、同じ衾に添慶なし、契りを交はすは譬へに云ふ、一樹の陰、一河の流れ、何れ淺からぬ他生の縁、然ればこそあれ人多き人の中にも誠ある人と思へば打明けて、今こそ磨が心の底を、告げ知らさんが、人に沙汰なく、頼みを叶へて給るかや、但しは否か、其返事を、サア聞きたい」と、宜ふより耶輸陀羅女は、心の内に扱こそは、兼て案ぜし事

ならめと、思へど故意と何氣なく、「是は又何思して、更まりたる君のお言葉、身に不相應の事なりとも、心力の及ぶだけは、命に代へてもお頼みを、必らず達し参らせん。先づ如何なる御事にや、其の概略を聞かせ給へ」と、近く居寄りて伺へば、「然らば語らん、必ずしも、此事他所へ洩らしなせそ。磨が願ひは外ならず、恥かしながら幼なき時、淫肆の廊へ通ひしが、何とぞして今一度、通ひて見たく思へども、此の宮中は何事の在すか知られど、晝夜とも間毎守りの女子どもあり。門々は嚴重に、番人を付けたる由、是を和女が死も角も、あやなして只一夜さ、忍び出ださせ給はらば、磨が悦び此上なし」と、偽り給へど耶輸陀羅女は、それと知りしか應へもせず、聞入なき面色なれば、良有りて太子は又、御不機嫌にて宜ふやう、「こやノウ如何に耶輸陀羅女、何ほ心安だてが、過ぎればとてもあれほどに、堅く言葉を交へながら、磨が頼みを聞入れぬか、オ、よし、それならば、自から思ふ計らひあり」と、ひぞり給へど耶

輪陀羅女は、心強くも疎め止めて、打嘆きて止まざれば、太子も流石詮方なく、其夜は其の儘臥し給ひぬ。

扱て其の翌日となりければ、太子御心に思召すに、昨日は本意なき偽りを以て、耶輪陀羅女を賺かせしより、却つて宜からぬ事となれば、今日は又それを詫び、眞心を告げ知らせ、开が上にて是非ともに、出家の手引きを致させんと、思案仕かへて其の晝は、一入いつもの歌舞の曲に、心を浮かせ給ひける故、附隨の者も此頃に無き、太子の御機嫌を拜せしと、悦びて尙取囉し、様々遇し参らすれど、耶輪陀羅女一人は心も解けず、而は共に浮かれても、只何となく、裏悲しき有様見えて、太子の御膝近くへ傳き参らせしが、早や春の日も暮れ果て、尙喋めくに打紛れ、程もなく小夜更けしかば、夜の御殿に入り給ひて、御簾洩る風を屏風に圍ひ、お伽の女中が叫きぬる、聲だにも聞えずなりて、物寂しげなる御床に、太子は靜かに耶輪陀羅女と差向ひにて宜ふやう、「イヤのう耶

輪陀羅女、昨夜は鷹が心にもなき、僻言を言ひさして、後の悔み一方ならず、今は何をか包み侍らん、我が眞心を告ぐるなり、必らず餘所に洩らしなせそ。扱て曆は世の常の、人とは大いに事異り、母殿耶夫人の胎内に、宿る事三歳が間、漸くにして卯月八日に、誕生は致せども、母は僅か七日にして、果敢なく此世を去り給ひ、今の橋邊彌は曆が伯母にて、實の母には在さぬかし、然れば實の母上は、三歳が間懷胎に苦み給ひ、それに就きての御逝去にもあるまじく、只是とても過世よりの定まり事とは諦めても、親となり子となる事、是も過世の約束ごとにて、最とも深かる縁なれば、何とぞ其の母君の、御菩提を弔ひたく、二つには一切衆生を、化度せん爲に思ひ立ち、出家したくは思へども、兼て和女も知る如く、忍び出づべき方なければ、何を力に望みを遂ぐべき。爰を能く聞分けて、和女宜しく手引して、此宮中を忍び出だして、望みを遂げさせ給はらば、此上の悦びなし」と宜へば耶輪陀羅女は、ほろ／＼涙を落しつゝ、「如



何にも君の仰せ事、今は御僞りとも思はれず、斯く果敢なき身を兎や角と、お目を懸けられ殊に又、人も多きに打明けて、妾に御望みを頼ませ給ふ、御心のほど難有く、とは云へ、我身一人にて、濟む事に在すならば、更々辭み侍らぬかし、素より故郷を出づる頃、再び父母を見かへらず、命を君に捧ぐるに、極めて参りしものからに、早速にお受けは致したけれど、此事ばかりは一存に、御畏みなば申し難かり、それを如何にと申すならば、過ぎし頃より橋袢の方、度々妾を招き給ひて、太子は云々なる望みあれば、若しや又宮中を、忍び出づる事もやあらん、其等の事も中々に、餘人にては叶はぬ事、其女が能く心を用ひ、何とぞ宮中に太子の心、留まるやうに傳きて、怪しき事もあるならば、早速優陀夷の女房まで、告げ知らせよ、さるからに、若しも太子の御身につき一大事ある時は、和女が落度と、聞捨てにはなるまじく、故郷の親までも、愛目を見んも計り難し、返すくも油斷なく、心を付けてくれよかしと、仰せを

藝に承はれば、先づ妾が身の上にも、成變はつて御覽じ遊ばし、些とは後の難儀をも、思ひやつて給はれかし、殊に又君の御胤、身に宿し参らせしを、御心強く見捨て給ひ、慣れも習はぬ深山路へ、御入あるとは抑やそも、餘り申せば御胸欲、聞えぬ君」と御膝に、縋り打臥し、よいと計り、さしも流涕噴き給へば、流石太子も此の一言に、御目も涙溜みしかど、此大事には替へられじと、耶輸陀羅女を抱き起し、「イヤのう姫の囁ち給ふは、更々以て無理ならず、逐一に聞届けて、道理とは思へども、妾の所を能く聞かれよ。磨とても心強く、十善天子の位を捨て、現在の親を捨て、玉椿の八千代までもと、枕を同一に契りし其女、況してや磨が胤を見捨て、立出づるは、禽獸より淺ましけれど、其等に替へて忍び難き、出家の願ひなればこそ、其女に手を下げ頼みもすれ、譬へば今我別れたりとて、是ぎり逢はれぬ事でもなく、磨正覺成道をさへ遂げたらば、いつにても逢はれる事、それをきなく悲みて、絆とならば磨とて

も、一旦誓ひし佛菩薩に、對して如何にも立ち難し。爰等の事を能く辨へ、偏へに頼みを聞届けて、易々發心報謝の道へ、手引をすれば其女までが、大善根ぞ」と宣へば、耶輸陀羅女は涙を拂ひ、「いえく私に、其の善根に預らず、假令如何なる奈落の底へ、沈めばとても太子さへ、尙此宮に落居給へば、それが何より身の幸福、外にお伽の姫もあれど、斯る嘆きは夢にも知らじ、あらうつゝ、なの我身かな、橋邊彌の方の仰せを守れば、君の御身の妨げとなり、又太子の御望みを叶ふれば、橋邊彌の方の御叱責、よし此身をば如何ばかり、お叱りあるも厭はれど、君此宮に在されば、萬民までの嘆きぞと、仰せも受けてあるからには、我私の迷惑にて、事濟むべきに非れば、如何せん、此場の仕合せ、是非もなや、然りながら、事を分けたる君のお望み、此上は此身に代へて、御願を達し参らせん」と、言へば太子は打悦び、「ヤ、そりや誠か、磨が望み、能う聞届くれたるぞ、いでや時分もよし、是より局々を忍び出でん、御殿の廊下の

欄干まで、送ってくれよ」と宣ひつゝ、手づから御衣を召更へて、御袴を召さるゝに、耶輸陀羅女は前後を忘じ、正體もなく打伏しつゝ、懐胎の若君の御行末を案じ暮らし、泣き崩折れて居たりしが、太子の御身支度に、忪へ兼ね御缺へ縫り着き、「のう、我君さま、易からぬ、御願ひをも心安く、達し参らす上からは、自らが願ひをも、聞召し給はれかし」と、啣ら給へば打點頭き、「それこそ何より易き事、磨が願ひを快く、叶へくれたる代りには、何なりと聞届けん。开は兎も角も、今丑三つ、草木も眠る宜い時刻、只今此所を立去らずば何れの時を期すべき」と、急き立ち給へば耶輸陀羅女は、心の内に何所までも、太子に附添ひ行くべしと、思ひ込みて御先に、立ちつゝ忍び出で給ふ。心地は薄き氷の上を、渡る思ひに異らぬ太子、御胸は只打轟き、今ぞ大事と踏み出し給ふ、一步毎に諸神諸佛を、深く誓ひて出で給ふに、御夜伽の女中達は、太子の爲には餓の、門戸に齊しき大難の、關所と思ひ給ひしに、數多のお伽も今宵

に限り、皆居睡りて他愛なく、宛然雛人形を、取並べたる如くにて、心づく者無かりしかば、是屈竟と密々打踰え、局々御簾の廊下、それより北殿へ移らせられ、御庭の門へ出でさせ給へば、太子はほつと一息つき、「扱て耶輸陀羅女、易々と、是まで忍び出でたる事、偏へに其女が働きたり、それにつき最前其女が、頼みなき事の由ありしが、开も如何なる事か聞かまほし」と、宜ひつ先程より、姫がしつかと縋りたる、片袖を振拂ひ、引離さんと仕給へど、耶輸陀羅女は何離さず、涙と共に言ひけるやう、「然れば我君聞召せ、最前君の御一大事を、心易く承はり、是まで誘ひ奉りしは、君の御爲二つには、妾が願ひを叶へたさ、扱て其譯は外ならず、自らをも俱共に、何所までも召連れ給へ」と、流石女の一筋に、慕ひ給へば太子は驚き、様々睚し止め給へば、姫は涙を堰き止め兼ね、「そりやお胴欲と申すもの、妾一人此宮に残り、二人の姫には蔑まれ、數多の者にも見下げられ、殊に又帝を始め、輪奐彌の方の御叱りを、何

と言譯せん方も、泣くより辛き事ばかり、今にもお腹の若君の、御誕生あつたとて、誰を力に守り立てん、父なき嬰兒か育つる事、何より辛き事なれば、是非とも我君お胴欲に、見捨てゝ行かせ給ふならば、此御差副にて自らを、殺して置いて御望みを、心の儘に達し給へ、それなくば如何なく、お側は離れ侍らじ」と、いよいよ縋りて忍び泣。太子はやをら引退けて、「こは淺ましき事を言ふ姫かな、磨正賢さへする上は、又の對面する程に、心辛くも懐胎の、嬰兒を大事に産み落し、守り育てゝ待ち給へ。再び歸る其時こそ、今の嘆きは昔語、返すくも聞分けよ。若し尙言葉を背くならば、未來永々離別ぞ」と、言葉激しく宣へば、耶輸陀羅女も此の一言に、恐入りて應へなく、やをら御袖を放ちたる、心の内の痛はしき。太子は自ら門の戸を、押給へども最と堅く、些とも動かざりければ、天を仰いで宣ふやう、「夫れ執着心は無明の局、火宅に止めて發心を焦せり。信心は娑婆を出づる劍、煩惱の繩を切つて、此悉達太子、



今淨刹じやうせつを出づる首途かどてに、我を守護しゆごする、諸神諸佛しよじんしよぶつは在ましまさぬか、おはすならば疾こく此門こゝを、開き給へ」と二つ三つ、叩き給へば、不思議に門の戸開きければ、太子は早くも潜り出で、耶輸陀羅女を見返り給ひ、「やよ耶輸陀羅女、今の如く情なげなくは言ひしものの、不思議の縁えにしに、是までの、契ちぎりも深く枕を交はし、八千代ちよまでもと語らひしが、今別るれば老少不定らうせうちぢやうら、若し是までにならんも知れず、必ず果敢なき心から、懐胎わくたいの若わかを亡なふまじ。又二つには帝を始め、橋邊はしべの方へ仕へ、孝心かうしん怠りなく心を盡せ。若し夜明けて魔が行方ゆへを、雖聞くとも其方そのほうは、更に知らぬと答へよ」と、暇乞いとまごひながらに示し言、宣ひつゝも道理ことわりや、此宮にして此君の、産湯うぶゆを召されしものからに、流石慣れ馴染なじみし者にも、是までと思召して、名殘涙なごりなみに暮れながら、暫し佇立たすみ給ふより、怪こゝろへ兼ねて耶輸陀羅女は、無體むたいに御袖ひだりを引止めつゝ、「是非とも君と諸共に、如何なる野山のやまに臥すとも、厭いとひはやらじ、召連れてたべ、お情なさけ、お慈悲」と、身を悶もたえ、今は

聲をも忍び兼ね、泣き叫びて打叩うちかたれ、太子ははつと心づき、取縫とりすがられし御袖を、打拂うちひ給ふ門の外そと、内には姫が命に懸けて、女の力に引止むるを、尙打ち拂とひ給へども、恩おん深ふかりし一心に、取縫りて放たばこそ。其時太子は言葉ことばを荒らげ、「扱しよねも執念しよねき姫が縁言いりこと、盡つぎせぬ名殘なごりは心の迷まよひ、然らば」と計り身を捻ひねり、振切り給へば、姫が縋すがりし、右の袂は引裂けて、耶輸陀羅女の手に残り、門とびの扉は閉ぢたりける。姫は片袖を持ちながら、戸へ立寄りて打叩うちかき、「このう、我君、今暫し」と、泣く聲さへも顛よるはれて、那方あなたこなた此方の隙間すきまより、何れの方へと差視さしけば、闇はあやなく御姿は、雲か霞か見も分かつ、見失ひて、わつと計はかり、御片袖を抱き占め、聲を上げつゝ思はずも、土地とちに岸破かっぱと伏し轉まび、前後まへ忘れて泣き沈みしが、良有よしつて心替かき、此儘このま此所に居る時は、人の見る目も憚はりありと、漸おそくにして立上り、落つる涙を拂ふとすれど、尙せぐり来る愛別離あいべつり苦の、嘆なげきは賢たへん方もなく、打萎うちしれつゝ袖棲そでの、塵打拂ちりひく、元來もとまし方へ

立戻り、懸て其身の部屋へ入り、又熟々と思案をするに、明日となりては言譯なからん、何うでも死ぬるが捷徑と、果敢なき心起りし折から、懐胎の若君の、止め給ふか計らずも、遽かに腹の痛みしかば、耶輸陀羅女は心着き、「オ、それよ、迷ひたり、果敢なき思案は止まるべし、別るゝ時の仰せにも、懐胎の我が胤を、必ず過ち無いやうに、育つべしとの事なりしを、假令如何なる憂日に遭ふとも、宿し參らせし若宮を、産み落しはこくみ育て、太子の正覺成道を、遂げ給ひて此宮へ、御歸りある其時に、自ら抱きて御覽に入れなば、然そや悦び給ふべし、其時こそは浮々と、今の嘆きに引易へて、身の譽れも顯はれん、それよくと氣を取直し、自ら腹を撫て擦り、片身に殘る片袖を、太子と思ひ敬ひつゝ、氣を慰むる心の内、思ひ遣られて痛はしき。案下休願悉達太子は、耶輸陀羅女が懐胎の御胤を、不憫とも痛はしとも、思ひは胸に餘れども、又捨て難き發心報謝の、道に心を傾け給ひ、是非なく萬乗の御位に、見替へて

只身一つにて、檀特山へ分け入らんと、遂に煩惱の網を切り、引止め給ふ耶輸陀羅女を、心強くも振捨て、既に右の御片袖さへ、那方の手に断裂れ残り、門の扉は自然と閉ぢぬ、是幸ひ、いざやとて、あやなき闇を辿り給へば、不思議にも何者か、御前後を打圍ひ、光明を放てば、其の光に、道は白晝の如くに明かりければ、太子は心に思召すやう、これ人間業にはあるまじ、衆生濟度の其爲に、磨兼てより諸菩薩の、結縁に及ぶ者なれば、刹佛のそれとなく、磨を加護する事なるか、あら難有や忝けなや。然らば既に赴きて、馬を曳かせんずと急ぎ給へば、程なく厩の前へ出て、其儘局に立寄りて、打叩きつゝ聲高く「車匿は居らずや、ヤヨ車匿、車匿く」と起し給へど、眞夜半と云ひ、殊に下僕はいきたなく、更に答への無かりしかば、尙大音に起さんと、しつゝも御目を掩ひ給ひ、「ア、我ながら鈍まじや、假令夜の更けたりとて、磨を守りの衛士どもの、其の篝火の火影さへ、尙此所彼所に見えぬるに、是まで忍び出て

たるを、見咎めて捕へられなば、何と詮なかるべし」と、思案をしつゝ、聲細く、「車匿起きませ〜」と、呼び給ふ數多度の、御聲不圖寢耳に入り、車匿は枕を擦げつゝ、暫し様子を考へしが、扱も合點の行かぬ聲、殊に夜深と云ひ、何者ぞ、何にもせよ先づ名を問はんと、それとは知らず仿なく、寢ながら聲立て尋ねれど、露はに名乗らぬ密々聲、尙訝かしと聞捨て、再び枕につきにける。様子に太子は困じ果て、思案に盡きて居給ふ内、不思議や幾匹も繋ぎたる、御馬の内轡陟といふ、御馬のみは背よりして、聊かも睡る事なく、夜半の飼を食みてありしが、太子の御聲を聞くよりも飼を食み止め、聲高く、嘶きながら四足を以て、四邊の羽目を蹴散らし蹴立て、其の音の音なられば、車匿は不審と起上り、咳きながら着類を纏ひ、彼の轡陟の側へ来て、様子を見れば馬は尙叫鳴して止まざれば、訝かりながら思ふやう、最前何者か門へ来て、起こすを現に聞きたるが、若し盜人にも來りたるを、馬は目敏き物なれば、是

を知りて我を起こす、叫鳴かも知る可らず、と獨言ちつゝ、門の戸を、開くるに嬉しく太子は聲懸け、「ヤヨ車匿か」と宣ふ途端、車匿はハツと打愕き、後退りして門の戸を、はたと閉て切り内よりして、「イヤ、案に違はぬ大膽もの、早や立去らぬと愛き目を見する」と、頭へながらの大音に、罵るを尙止め兼ね、太子は四邊を懼りつゝ、最も優しき御聲にて、忍びやかに宣ふやう、「この車匿、磨なるぞ、此所開けよ」と叩き給ふに、車匿は聞き慣れし太子の御聲、とは思へども此の夜深に、只お一人にて此の所へ、御入あるべき因由もなし、道は何者か我が寢息を考へ、慮につけ込みての作り聲、其の手は食はぬと腕限りに、扇をしつかと固めつゝ、「イヤ、然な叩かずとも名を名乗れ、誰ぢや〜」と、問はるゝ故、太子は扇へ寄添ひ給ひ、「磨は悉達太子なり、早や〜開けよ、戸を開け」と、確かに聞ゆる太子の御聲に、愕きながら、「ハツ」と答へて、早くも衣類を更めつゝ、門の戸開き土の間に、諸手を突きて平伏せば、太子は進み

て宜ふやう、「如何に車匿、此の夜深に、磨が只一人の逃げ、然ぞかし不審なるべきが、些と譯あつて行く方あれば、磨に馴染み一健陟を、急ぎ自通りへ曳出だせ」と、仰せあるを聞取ず、車匿は無禮の御答め、如何ばかりかと恐れしに、其のお叱りはなく健陟を、曳けとばかりの仰せなれども、こは唯事と思はれれば、太子の言葉を返して言ふやう、「こは勿體なや太子の仰せ、それとも知らず無禮の舉動、御叱りもなく健陟を、曳出だせと仰せあり、早速お承けする筈なれど、今此の夜深に何の料に、御馬に召し給ふぞ」と、恐るゝ申上ぐれば、太子は尙も密かに、「然れば些と仔細あつて、健陟に乗りたければ、疾く／＼曳け」と宣ふにぞ、「シテ何所まで行らせらるゝや」と車匿再び難じければ、「是より天門の方へ志すなり。時移らば事缺けん、早く曳出だせ」と急ぎ立て給へば、車匿は扱こそと心に悟り、彌よ頭を打掉りて、「假令太子の御意にもせよ、此儀ばかりは決して叶はず、其仔細は過ぎし頃、優陀夷殿の仰せなりとて、右

將軍下拙を招き、仰せ渡されし趣きは、汝等も知る帝の若君、幼なき御時より、只ならぬ御望みあれば、宮中を忍び、出で給ふべきも計られれば、不時に太子よりお召の駒か、御指揮あるととも、迂濶と曳出だす事勿れ、若し御用の事ある時は、優陀夷殿より指揮あらん、其外は如何なる者の、指揮にてもお召しの駒を、曳く事堅く止め置くと、厳しき仰せを受たれば、是非とも御用とあるならば、優陀夷殿へ伺うて、お指揮を受け、其の上にて何所までもお供仕らん。此儀如何に候」と、恐るゝ色なく述べければ、太子は礎と御胸に應へ、是までの御心願も、水の泡とや消えなんかと、一度は悔み給ひしが、良御心を取直し、車匿をはたと睨め付け給ひ、「憎き下郎が一言かな、如何に磨が年若しとて、然程までに見侮りしか、身の程をも省みず、君の言葉に背く不埒もの、磨と優陀夷とは君と臣なり、家來の言葉に従ひて、君の心に背くと云ふ、詭が何所の果にかあらん、例があらばそれ聞きたし、君の命に従ふをこそ、家來の道と云ふ

ぞよ」と、心に恥ぢてそれとはなく、言葉で戒め脅し給へば、車匿は始めて悉達太子の、御怒りを受けて思ふやう、是まで太子は殿上殿下の者が、如何なる事あるとも、遂に人の氣を破り給はぬ由に、兼々伺ひしが、計らず今宵の御腹立、扱は我ほど不忠なる、者は無きよと忠不忠の、理道に暗き下司と云ひ、正直一途の心から、一度は優陀夷よりの、戒めを堅く述べしが、御怒りを取直し、君の御機嫌さへよくば、是忠ならんと思ひ込み、再び平伏し尙敬ひ、「こは恐入り奉る、何しに仰せを背くべき、然程の事に在すならば、直ぐ様糺を曳き出ださん」と、内へ入りて華美かなる、お召の鞍籠手綱を揃へ、件の駒に飾りつけ、御目通りへ曳き出だせば、太子は御機嫌を直し給ひ、即座に駒へ跨りて、「イヤ車匿、磨が今叱りし事、必ずく氣にな懸けそ、是より磨に引續き、供せよ」と仰せあれば、「ハッ、畏まり候へども、太子は未だ御存じなきや、宮中の御門くは、皆守りの役を付けられ、更深と云へど、アレおれを御覽せよ、

あの如く庭火の篝炎々と、照り輝き候へば、人は思か昆蟲なりとも、忍び出でべき方とは、更に之無く候」と、言へば太子は點頭き給ひ、「然れば磨も兼て知りぬ。偉監門は常に閉ぢて、不開の門と稱へぬる、本名は玄武門と云へば、發心報謝を遂げぬべき、首途には幸ひの門なり、急ぎ彼所へ響を、向けて案内をせよかし」と、あるに車匿は畏まり、甲斐くしくも先に立ち、聽て偉監門の際まで来れば、此の門ばかりは常平生、不開の門故庭火もなく、守りの衛士も在る事なけれど、門の扉には四十里響く、鳴り鐘を附けられたる由、兼てより御存じなれば、太子は是に度胸をつき、再び天を打仰ぎ、祈念を凝らし、て宣ふやう、「磨、悉達、諸神諸佛に申す。今煩惱の絆を断つて、正覺成道を遂げ、普れく衆生の願を、満てん爲め出家する者なれば、今神通力を以て此の一重の門を越えさせ給へ、もし然なくば我が本願、立處に空しからん」と、三度唱へ給ふ折、そわれ、空に響く塵ほどの、黒雲忽ち四方に蔓延り、法恩

の雨は篠を突く如く、いとも烈しく降り下り、其の黒雲の中よりして、輝く電光眼を射て、耳を貫ぬく計りにぞ、雷神鳴り響きて、偉監門に落れば、太子も車匿も打愕き、暫し目を閉ぢ躊躇ふほどに、只一響きの雷にて、忽ち雨歇み雲辨れて元の如く晴天となり、星現はれて煌めきける。如何にも不思議と悉送太子、四下を徧々御覽あるに、這は不思議や、今まで閉ぢたる不開の門の兩扉は、左右へ開けてありしかば、雀躍しつゝ車匿に向ひ、「如何に、車匿、あれを見よ、魔が願ひの空しかられば、忝けなくも諸神諸菩薩、薩埵の力を添へ給ひ、今の雷神にて四十里響く、扉を難なく打開き、天水の法雨を以て、庭火の篝を濕したれば、守護の者にも餘の人にも、見咎めらるゝ禍なし。いざ、續けや」と、手綱搔い繰り籠を賦立て、乗出し給へば、城門の外よりは、御馬の先に、持國、多聞、增長、廣目の四天王先驅し給ひ、惡魔障害を拂ひつゝ、梵天帝釋及び淨居佛、飛行無遍自在天、太子の前後を圍繞しつゝ、

又車匿健勝には、諸神諸菩薩力を添ゆれば、車匿は駒に些とも遅れず、素より駒は駿足にて、嘶く聲は四方に響き、雲霞を踏分け、繁る草茅踏しだき、少しも疲れず走る程に、太子は明星の光を目當て、那方こそ天門と、在合ふ、木の枝を鞭に手折り、御心の儘に逸ませて、息をもくれず飛ばせ給へば、忽ち檀特山の路の行程、五百里の陸野道を踰え、又五百里の谷川道を踰え、又三百里の山陽道を踰え、遂に一夜の内に一千三百餘里を、神通力の加護に依つて、難なく走りて最と嶮しき、一つの高山に着き給ひ、此所にて暫し息はんとて、巖陟より下りて樹下に繫がせ、車匿を厚く勞ひ給ふ。然れば太子の御年、此時正に十九歳にて、金殿玉樓を振捨て、妻子を見返らず、是程までに御苦勞あるは、开も何の爲なるぞや。此世に在さぬ摩耶夫人に、再び邂逅ひたきとて、偏へに戀慕渴仰し、二つには又普れく衆生の、煩惱を救ひ取り、極樂淨土へ引導せんとの御誓願にて、今世の中に有情非情の昆蟲草木、凡て生とし

生けるもの、此の結縁に漏るゝ事なし。況んや人間は貴きも賤きも、富貴も貧しきも、老若男女も押並べて、救ひ取らるゝものなれば、報じてもく、猶報じ盡されぬは、此の太子の報恩なるを悟り、皆釋迦如來を信仰して、怠りなく香華を供へ、能く看經を營むべし。めでたし。

釋迦八相倭文庫第一編終

明治四十四年三月十日印刷  
明治四十四年三月十五日發行

袖 珍 文 庫  
(一) 庫 文 倭 32

東京市神田區佐栢木町二十一番地  
編輯者 鈴木種次郎  
東京市本所區吉岡町十二番地  
發行所 山本銀次郎  
東京市芝區宮下町三丁目五番地  
印刷者 牛坂三郎  
東京市芝區宮下町三丁目五番地  
印刷所 邦文社

發行所 三教書院

電話長本局三三六一番  
振替東京四五八〇番

東京市神田區佐栢木町

袖珍文庫大賣捌所

關東元	東京神田區表神保町	東京堂
關西元	大阪市東區北波邊町	杉本梁江堂
中京元	名古屋市中區玉屋町	星野文星堂
東京	林平書店	新潟 萬松堂
日本橋	至誠堂	京都 車枝書房
同	文林堂	同 文港堂
同	前川書店	廣島 積善館支店
同	東海堂	岡山 山名總會社
同	北隆館	久留米 菊竹書店
同	勉強堂	博多 積善館支店
同	上田屋	京 日成書房
同	修文館	大連 大阪屋

◎其他全國各書店

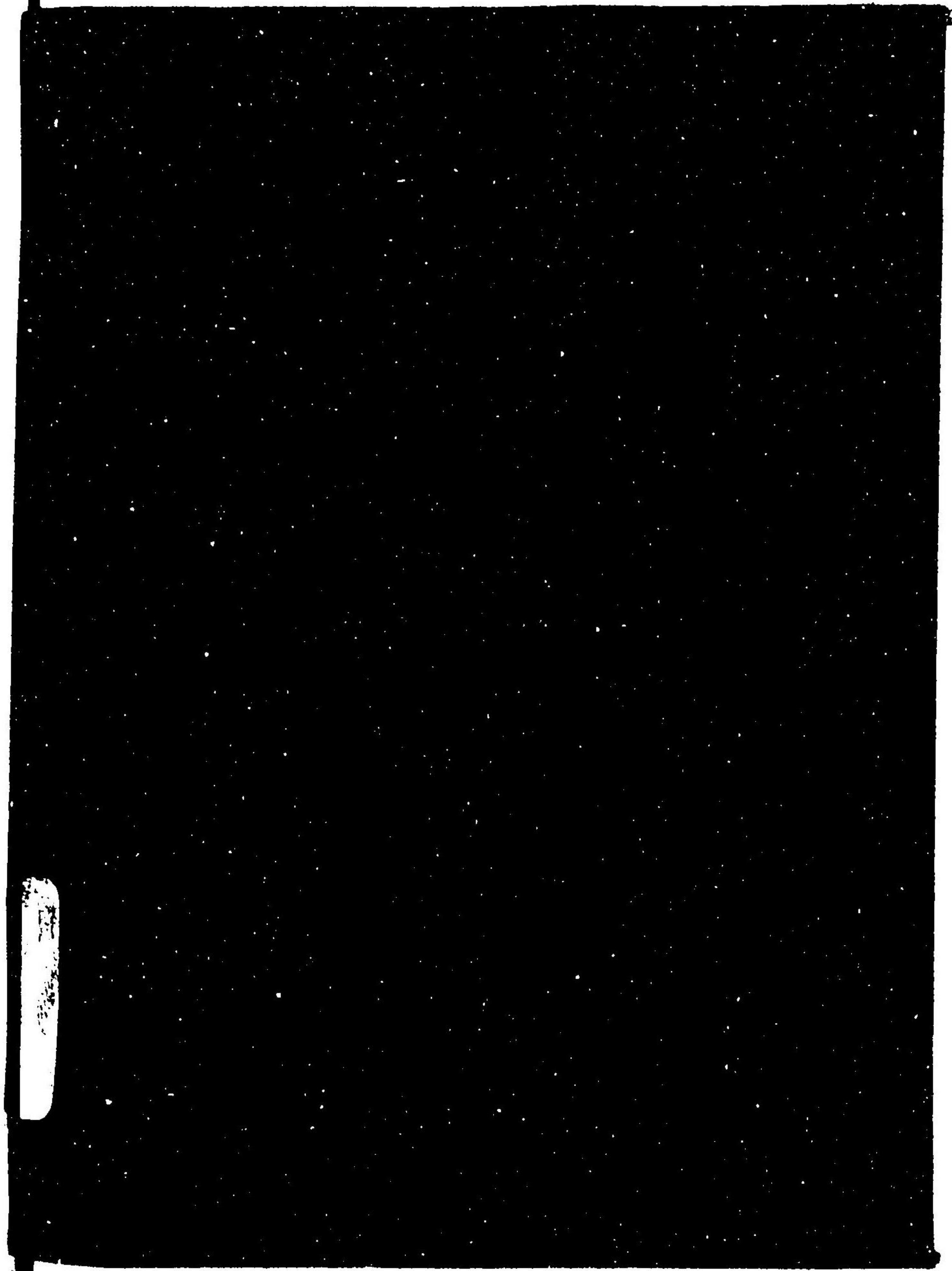
袖珍文庫目錄

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
東海道膝栗毛	萬葉集	修紫田舎源氏	昔語質屋庫	墨田川梅柳新書	平家物語	いろは文庫	修紫田舎源氏	平家物語	平家物語	文章軌範	武將感狀記	いろは文庫	いろは文庫	
上編	上巻	二編	合巻	下編	下編	一編	中編	全	上編	全	全	中編	上編	
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	
浮世風呂	燕村七部集	聽耳世間猿	雨月物語	誹風やなぎ梅	聯珠詩格	十三種百人一首	徒然草	武經七書	修紫田舎源氏	東海道膝栗毛	枕の草紙	修紫田舎源氏	古今集	誹風やなぎ梅
全	全	合巻	二巻	全	全	全	全	全	四編	下編	全	三編	全	一冊
西鶴物語	近松淨瑠璃	八笑人	近世說美少年	世間子息氣質	世間娘氣質	世間子息氣質	【近刊】	35	34	33	32	31	30	29
一編	一編	全	全	全	全	全	入繪水	入繪梅	入繪清談	入繪假名文章	入繪釋迦八州倭文庫	風俗文選	常山記	入繪本太閤記
							一編	一編	一編	一編	一編	全	一編	一冊



261

926



089380-000-3

特63-844

积边八相倭文库 第1編

万亭応賀／著

M44

DBM-0882

